
stletoe **戦場のもみの木の下で IS学園、最後の一年間 セカンド・シーズン**

黒野 萌音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The kissing under the mistle
toe 戦場のもみの木の下で IS学園、最後の一年間 セカ
ンド・シーズン

【Nコード】

N4719U

【作者名】

黒野 萌音

【あらすじ】

シャルロット・デュノア IS学園、最後の一年間 のセカ
ンド・シーズンです。ついに心を通い合わせることが出来た一夏と
シャルロット。ヒロインズ達それぞれの思惑はあるけれど、でもこ
れから二人の幸せな日々が始まる はずだったのに……。絡
み合う人と人の思惑。蠢く、黒い気配。世界は次第に捻れ、歪み、
そしてシャルロット達をも巻き込んでいってしまう。

プロローグ

The gunpoint founder .

この作品は『シャルロット・デュノア』 IS学園、最後の一年間

『 のセカンド・シーズンです。前作をお読みいただいている前提で書かれておりますので、キャラクター等の設定説明は本文に入りません。

また、キャラクターの設定や世界観は、ほとんどを原作『IS インフィニット・ストラトス』より引き継いでおりますが、『2年後』という作品の設定性質上、必ずしも同一ではありません。原作7巻の途中までをもとにしたストーリーですが、エピソードを含むその後の原作とは一切関係のない『パラレルワールド』を舞台としております。

最初の音が聞こえたとき、シャルロットは風船が割れたか、もしくは車のタイヤがパンクしたのかと思った。ただ、最近のタイヤは音を立てて破れることがほとんどないから、『一体、なんだろう？』くらいに彼女も軽く考えていた。

けれど次の爆発音が聞こえた時、バスの角度が変わった。

前輪の方が沈みこみ、後輪の方が浮き上がる。

ガクンツと揺れた車内。突然の出来事でパニックに陥った女子達の悲鳴が響く。

車両の先頭に座っていた教師たちが立ち上がって叫んだ。何かを必死で指示しているが、まったく聞こえてこない。

それでも、シャルロットは落ち着いていた。

自分の周囲の生徒に、まずは落ち着くように声を掛け、それぞれがまた周りの生徒に同じことをしたあと、身を低くして待機するように声を掛ける。

普段からの人望に厚く、また自由国籍を取得した専用機持ちである彼女の言葉は、周囲の女子たちにとって非常に信頼のおけるものだった。そしてものの数分で、車内は一旦静寂に包まれる。

が

ドンツ！ ドンツ！ と今度は爆発ではない、発砲音が車両の前部に響き渡る！！

再び車内はパニックに陥り、女子たちの金切り声や悲鳴で溢れ返った。

そして。

バガン、と鈍い音がして、バスの昇降口の扉が壊された！ そしてそこから何人もの黒づくめの人間が侵入してくるッ！

「Freeze!!」男の声で一人が叫んだ。最初に入ってきた黒づくめだ。その手には拳銃が握られていて、黒づくめはそれを振りかざし、車内の生徒たちに向けて激しく叫びながら威嚇した。

生徒たちは半狂乱で叫び、泣きわめく。しかし黒づくめが天井に向けて撃った3発の弾で、あっけなくその声は、止んだ。

あとに彼が叫んでいる言葉は、よく聞き取れなかった。ただ、身振りでも『手を上げる』と言っているようで、生徒たちは全員歯向かわずに頭の上に手をのせていた。彼らもそれ以上、発砲はしなかった。英語だと、シャルロットは思ったのだが、何故か随分聞きづらい。訛り、というよりイントネーションが違うのだ。けれども、彼女にとってその言葉が持つ音は、聞き覚えがあるもので……妙に不思議な気がした。

目を閉じて、シャルロットは考えた。

車内の黒ずくめは全部で3人。ひとりにはハンド・ガン。残りの二人はアサルト・ライフル。

僕なら

やれないことは、ないッ!!

シャルロットがついに『ラファール・モアノー』を展開しようとした、その時だ!

昇降口から突如黒ずくめの応援が現れた! 4人……いや、5人!

! 総勢8名の武装集団が彼女達の乗るバスを占拠する。

シャルロットはISを呼び出すのに、集中しようと呑んだひと息をそっと吐き出した。

僕だ。

荒っぽく振り回される体。

空と地面が、何度も行ったり来たりする。

そのうち景色は空と海が交互になり、最後は暗い穴に押し込められる。

彼女の唇が最後の力で三文字を紡ぐ……

Chase the abductor・1 (前書き)

フイニスト
黒野です。

スイマセンでした。未完成のものをUPしていました。
改訂版になります。よろしく願います。

「一夏ッ!!」

普段は絶対に他の生徒がいる場所で名前を呼ばない千冬がそう呼んでしまったのは、そうしてしまっただけの緊急事態に違いなかった。一夏もそれはすぐにわかった。

何故なら耳に飛び込んできたさっきの音は、間違いない、爆発音!

しかも、それは悪意のある『兵器』によるモノだ。これは、おそらくは何者かによって計画された事態なのだ。

「ああ、わかってるよッ!」

そう言っで一夏は立ち上がると、昇降口まで走る時間も惜しく、横の窓を全開に開けた。

振り返り見やると、さっきまでの悄然とした表情は全部消え去り、緊迫した面持ちのセシリア・オルコットがいる。彼女の顔を見た一夏も、頭の中が熱を帯びてくるのがわかる!

「行くぞ、セシリアッ!!」

「ええ、準備は出来てましてよ!」

二人は直感していた。これは 絶対にまずい何かが起きている!

そう心臓の鼓動が告げていた。早鐘のように、鳴り響いていた。

「白式!!」

乗り出した窓を力一杯蹴り飛ぶと、一夏は叫ぶ。瞬間、まばゆい光に体は包まれる。

そして粒子変換の光の粒は、瞬きの次の瞬間には白銀の巨大なスラスター翼に姿をかえた。

ドンッ！

耳をつんざく爆音を残して、白式は一気に最高速まで加速。その後ろには、メタリック・ブルーの輝く機体がピツタリと付いてきている。

……煙が、見える。

それがぐんぐん近づく。白式の数秒なら、ものの数秒でたどり着くはずだ。なのに、一夏は妙に焦っていた。そして

「くっ、……！」

痛みでもなく、よくわからない刺激のために彼は自身の胸を押さえつけた。何かが、胸を裂いて出てくるみたいだ。

（なんだ？！ この胸の奥からこみ上げてくるみたいな……これって、なんだ？ 気持ちが悪いな……）

一夏はその『正体不明の何か』が理解できないままに、白煙の立ち上る『危機』の真上に到着してしまう。

実は それこそが、この先に起きる最悪の事態を知らせる『虫の知らせ』みたいなものだったことに、この瞬間の一夏は気付くはずもなかったのだが。

セシリアが息を呑むのが聞こえた。

煙は、さっきまで自分達のバスが走っていた橋から上がっていた。橋桁から数箇所、橋杭からも数箇所。

そして、橋の中央辺り、橋桁の一部30mほどが 斜めに、今にも落ちかかっているッ！！

「い、一夏さん！ あそこッ、バスが！！」

セシリアがその落下しそうな橋桁の上にバスを発見して指さし、叫んだのと、

「一夏ッ！ お前は、何をグズグズしている！！ さっさとバスを移動しろッ！！」

ハイパーセンサーにビューが映り、ラウラがもの凄い形相で叫んだのは、ほぼ同時だった。

センサーが素早く二段階の望遠を行い、漆黒の機体 シュバルツ
ア・レーゲンを捕らえる。

落下しそうな橋桁を前に、右腕を突き出した姿。

「ラウラッ?!」

一夏が叫ぶ声に、彼女はすぐには返事が出来なかった。

センサー越しになんとか振り返った彼女の横顔が見えた。血管が浮き出るくらいに真っ赤で、その上、苦悶の表情を浮かべていた。そして、

「一夏……さっさと、しろッ！ もう……、そんなには、もたせられないのだ……」

絞り出した、必死の声。

一夏は気付いたッ！

ラウラは『アクティブ・イナードナル・キャンセラ A I C』によつて、落下しようとする橋桁全体を必死で停止させていたのだ。しかしそれは明らかに『A I C』の許容限界重量を越えた、オーバーパワーだった！

「ぐうッ……」

耐えかねたラウラの苦悶の呻きと共に、橋桁がガクンツと角度を変えた。

「ラ、ラウラッ?!」

そして バスがッ！ 斜面のようになった橋桁を滑り落ちるようにッ……！

「こおんのーッ……!!」

支えを失うように落ち始める橋桁。しかし間一髪、橋桁の下に滑り込む、黒い影。

次の瞬間、エネルギーシールドの展開を示す大きな光が橋を下から支えた！

「鈴ッ！」

「鈴さん！」

「ぎぎぎぎっ……！！　ち、ちよつと、バカ一夏にロール女っ！

さつさと、バスを移動させなさいよー！！」

鈴の甲龍だ。大出力の『大天黒牌』が土壇場でバスの危機を救った。それでも、決して予断は許さない！

「セシリア、行くぞッ！」

「ええっ……！」

二機は橋桁の上に取り残されたバスに向かって飛んだ。

ガラガラッ……

次第に崩壊が始まり、不安定な橋桁に取り残されたバス。一夏とセシリアは辿り着いて、その状態に息を呑む。

もう、　　いつ崩れてもおかしくない橋桁。　　かろうじて横転せずにいるバスの車体。

「……っ?!」

血の気の引いた顔で身を強張らせるセシリアを、一夏は急き立てる。

「急げ、セシリア！！」

一夏がバスの前方に、セシリアが後方に取り付く。

「みんな、もう大丈夫だ！　　しっかり掴まっっている、すぐに安全なところに移動するぞ」

一夏は車内に向かって叫ぶ！　　安心させようと、出来るだけ平静を保って言ったつもりだが、一体どのくらいそれが出来たのか。考える余裕すら、本当は一夏にはなかった。

けれどもフロントガラス越しに目を合わせた女子生徒達の顔が、恐

怖から 希望や安堵に変わるのが。

「よし、セシリア。バスを移動する」

「了解しましたわ！」そう言っただけでセシリアはバスの底部を両手でしっかりと掴む。「……いつでも行けますわよ、一夏さんッ！」

一夏もバンパーの下に手を突っ込み、持ち上げる。「ああ、いくぞ……」

車体の傾きに注意して、二機のパワーバランスを揃えて、……慌てるな、集中しろ！ 一夏は、そう自分に言い聞かせ、白式のスラスタ―出力を上げていくっ！

集中しろ！ 集中しろっ！！ 一夏は、何度も自分に言い聞かせるように呟く。

その時！

「織斑君、大変ッ！！」

ひとりの生徒が突然窓を開けて一夏に向かって叫んだ！
ぐらっ……

一瞬、集中を削がれた形になった一夏は、左のスラスタ―の出力バランスを失敗する。

「キャッツッ?!」

窓から放り出されそうになって慌てる彼女。

「あっ、危ないッ！！ 今はダメだ、すぐに窓を……!!」

「でも！ ……でもっ！！ 大変なの。本当に大変なのっ……!!」
その生徒は自分の身の危険を感じてなお、叫ぶように一夏に何かを伝えようとしていた。

「……すぐに安全な場所に移動する。話は必ずその後で聞くからッ！」

だが、一夏も必死だった。事態は一刻を争うのだ。

「急いでッ！ ……ラウラも鈴木も、もう長くはもたないんだ!!」

「う、うん、……わ、わかったわ」

一夏の言葉に押され頷く彼女の顔は、しかし随分と沈痛な表情だっ

た。よっぽど重要なことなのかもしれない。……が、今はどうしても時間が惜しい！

「セシリアっ！」

「ええっ！　　行きますわよ！！！」

二機のISはバスをしっかりと支えながら、ゆっくり上昇を始めた。

一夏とセシリアは、ゆつくりとバスを移動する。

最初こそ不安定だったが、飛び立ってしまえば割と安定を保ちやすかったのが一夏にとっては救いだった。時速10kmくらいのスピードで慎重に飛行しながら、バスを下ろせそうな場所に向かって移動する。二人が目指したのは、橋を渡りきった先の道路だ。緩やかに曲がる左カーブがあり、上下線が各二車線ずつ、さらに上り側には登坂車線もあった。一時避難にはもってこいの場所だった。

肉眼でその場所を確認できるくらいの距離まで近づいた時だった。ハイパーセンサーにチャンネルが開き、簪の顔が映り込む。

『どうした、簪？』一夏が訊ねると、簪はほんのちよつとだけ眉をしかめて困った顔をした。

『4台目が急ブレーキで止まったところに、……5台目が追突したの。……それほどスピードが出ている時じゃなかったから、重傷者はいないけれど……何人かは自力で……移動できない生徒がいる』

『わかった。こっちが片付いたら、すぐに行く』

一夏はチャンネルを閉じる。

『セシリア、聞いていたか？』バスの後ろをかかえて飛行するセシリアに、通信を切り替えて言った。

『もちろんですわ。重傷者はいないと言っていましたけれど、……怪我をした方はいるということですよね……』

『急ごうッ！』
『ええ』

もう眼下まで迫った道路には、先に橋を渡りきったバスの1、2号車が止まっている。

そしてその横には2機の黒いISの姿。甲龍とそのすぐ脇、肩を抱かれてぐったりとしているシュバルツァ・レーゲンが待機しているのが見えた。

あのプライドの高いラウラが顔も上げられないくらいに消耗している。一夏はそれほどの負担をラウラ一人に負わせてしまったことに胸を痛めるが、その彼女の奮闘こそがこの惨事を未曾有の惨事から救ったのだ。さすがはドイツの生んだエース・パイロット。彼女の素早い判断と、決断力には自分なんかまだまだ及ばない、と敬服した。

二人のISの脇に着地する。そしてかかえていたバスを静かに地面に下ろすと、車内を一度見回した。特に異常はなさそうだが。窓から覗く顔にはさつきまでと違い、安堵の表情が浮かんでいる。それを見た一夏も、いくら胸の中の重しが軽くなつた気がした。

『鈴！』

それほど距離があるわけではなかったが、一夏はチャンネルを開いて鈴と通信を行う。

『ここを……任せても大丈夫か？』

いくつかの意味を含んだ言葉だった。

ラウラのこと。移動してきたバスのこと。その中の生徒達ももちろん無事だった2台のバスのこともそうだ。

そして何よりこの事態が襲撃によって起こった可能性が高い、ということ。一夏達が離れた後の手薄なところを狙われることだって十分に想定できるのだ。

そうなった時のこと。 鈴に預けようとしているモノは大きかった。

けれど。

『さつさと行きなさいよッ！ ここはあたしが見てるわ』

こともなく返す鈴の返事は、勢いや口先だけのものではないのだと彼女の眼は語っていた。

『了解』

鈴は一夏を顎で追い払う。

普段はまっすぐにしか進めない車のおもちゃみたいに『思い立ったらストレート』を地でいく少女なのに、どうしてかこういう有事

の際は頼りになる。別人みたいに視野が広がって、誰よりも冷静に物を見る。一夏は彼女のそんなギャップのある性質が嫌いではなかった。

いや、鳳 鈴音という少女まるまるがむしろ好きだった。

白式のスラスタ―推力を上げると、彼女の影はどんどん小さくなっていく。目で見えなくなってもまだ、彼女の視線を背中に感じているような気がした。

ものの数分で簪のいる4号車と5号車の場所にたどり着いた。

『簪ッ』

着陸するやいなや、一夏は叫んだ。

『……大きな怪我人はいない……。一番怪我がひどいのは……。5号車のドライバー……。でも生徒も頭を強く打った子がいるから、歩いて移動するのはムリ……。』

地面を滑るように打鉄式を移動して近づいてくる簪。

『そうすると、またバスごと移動させるしかないですわよね？』

『……そうだな』

のぞき込んできたセシリアの顔に振り向いて言う、一夏。簪も頷いた。

『簪を入れてもIS3機か。出来るだけ時間は掛けたくないけれど、やっぱり二往復するしかないのか……。』一夏が顎に手を当てて思案しながら言う。

すると簪が怪訝そうに返した。

『3機って……。、筭もいるけれど……。？』

彼女が指さして示す先には、紅椿の真紅のボディーが陽光を浴びてキラキラと輝いていた。メタリックの装甲が、雲の加減で変わる日差しによって乱反射したみたいに見える。

そして操縦者の　　全くの無表情の顔が一夏達の方に向けられていた。

篠ノ之箒の形をした、無機質な。まるで紅椿のパーツの一つみたいにして、一夏の視線を感じても反応しないその顔。

『……………』

一夏の目がゆっくりと移動していつて、最後に箒の目を捉えた。けれどもその瞳に彼女の表情は映らない。センサーの一部みたくに対象を認識しただけで、過去のデータと照合するとそれが『白式』であり、『織斑一夏』。彼女の閉ざした心にはそれ以上の情報は必要がないかのような様子だ。顔色一つ、変えることはなかった。

『ほう、き……………？』

一夏は小さく、彼女の名前を口にした。その声が届いたのか届いていないのかは、結局彼女の表情からは読み取れなかった。

飛び立つ四機のIS。

二台のバスを、それぞれ二機の機体が持ち上げて移動する。

一夏の相方はさつき同様セシリアだ。一度目と比べて随分と安定感を増した作業。おかげで後ろを飛ぶ簪、箒の二人組とは少しずつ距離が開いていく。しかし、一夏はそのことに気づいていなかった。

一夏の回線が開き、そこにセシリアの顔が映し出された。

「一夏さん、ちよつとスピードを落とされた方がいいかと思えますわ。後ろのお二人のサポートもしてさしあげないと……」

「あつ……。ああ、そうだな。悪い、セシリア……」

「別に謝ることもないですわ、一夏さん。このわたくしとあなたのペアが誰よりも優れているのは自明の理。言ってみれば、当然の結果ですわよ」

そういつて、ふふんと鼻を鳴らすセシリア。

「……それより一夏さん。なんだか顔色がすぐれないように見えますが、お加減でも悪いのですか？ もし、そうでしたらこのセシリア・オルコット、戻り次第手厚い看病をさせていただきますわよ！」

真剣な眼差しを回線越しの一夏に向ける、セシリア。しかし、

「……………」

「一夏、さん？」

一夏は答えなかった。じつとセシリアの顔を見つめたまま何度か唇を動かそうとするが、結局、それは言葉にはならなかった。

複雑な表情をした。音にして、口にしてしまえば胸の中はもう少し軽くなるのだろうか、織斑一夏という男は不器用だ。そう簡単にはいかない。その様が全部表情に出ていた。そしてその意味をセシリアは取り違えた。

「……………もうっ。恋人が出来た途端にそんなつれない態度なんて、あんまりですわ」

セシリアはぶうつ、と頬を膨らました。

『ええ、ええ。冗談ですとも！ お気になさらないでくださいましつ！！』

彼女はつんとすると、回線を切ってしまった。

そんなつもりはなかったのだが、誤解を解く元気も出てこなかった。

ただ、いつもより弱くなっていた彼の心は、そんなセシリアのちよつとの一言でも小さな傷になった。

痛みとは違う疼きが、胸の奥の方でした。

ピッ。

『ちよつと一夏あ！ アンタ、何、やってるの！ さっさと戻ってきなさいよーつ！』

突然、ハイパーセンサーに飛び出したのは鈴の顔。

いつも以上にでっかい声を出すものだから、さすがに一夏のくさくさした気分も一発で吹き飛んでしまった。

『な、なんだよ、鈴。そんなにでっかい声じゃなくなつて、お前の声ならどこからだつて聞こえるぞ』

『ンツ！ なんかム力つくリアクションね……って、そうじゃなくつて！』

と、続きを言おうとする鈴の回線を無理矢理端のほうへ追いやって、ラウラが回線をつないできた。

『くだらんやり取りをしている場合か！ 一夏、緊急事態だ。すぐに戻れ』

ピッ、とたったそれだけ言ってラウラと鈴の回線は切れてしまった。

『お、おいっ！ はあ、一体なんなんだよ……』

一夏が眉間に皺をよせてため息をつく、再び開いたセシリアの回線が神妙な面持ちの彼女を映した。

『……ラウラさん、何か様子が変わりましたわよね？』

『ん？ ああ、確かにそうかもしれないが……』

続けてちよつと不満を口にしようとする一夏を、セシリアの言葉が遮る。

『一夏さん、急ぎましょう。わたくし、何か嫌な予感がしますわ』

『……どうした、セシリア？』

『わかりませんが、こういう時のわたくしの勘は当たってしまうことが多いのですわ。何もなければいいのですけれど……』

そう言って目を伏せるセシリア。彼女の表情を見ると次第に自分のなかにも不安が膨らんできて、一夏は表情を固くした。

『急ごう、セシリア！』

『はい……』

二人は慎重に機体の速度を上げた。

ドンッー！！

「待て、一夏ッ！ 戻れ、バカモノッ！！」

ラウラの声など一切耳に入らず、一夏は全速力で飛び立ってしまふ。

「バカがッ！ 闇雲に探し回ったって見つかりっこないのだ！ クソッー！！」

珍しく奇立ち露に地団駄を踏むラウラ。しかし疲労した体がいふことを効かずにフラフラとして膝を付く。

「ちよつと、ラウラ！」

鈴が駆け寄って肩を貸した。

「でも、こんなことになるなんて……」

セシリアがぼそつと呟く。

「アンタね、よくそんな悠長に構えてられるわね?!」

鈴がそんなセシリアに喰ってかかった。しかし、セシリアは動じない。

「ごういう時こそ、冷静さを失えばすべてを失うものですわ。……ですから、一夏さん。その行動は正しくないですわ。それこそ相手の思いつボ……」そう言っつて、下唇を噛む。

「みんな、ちよつと……」

不意に呟いた簪に、ギユツと四人全員の視線が集まった。「うっ……」とほんの一瞬、腰の引ける簪であつたが、今回はそうもいつていられない。

「おかしい……。コア・ネットワーク上に、シャルロットの反応が……見付からない」

「あつ……」セシリアが素早くハイパーセンサーをフルスクリーンで開いて確認した。「ない。……おかしいですわ、確かにこの地球上にも、それに宇宙空間を探しても……いない。そんな……」

突然、ラウラの血相が変わつた!

「まずい!! 誰か、一夏を呼び戻せツ!」

見たこともないくらい目が血走つていた。奥歯を噛み締める音がギリギリと聞こえるようだった。彼女の美しい顔が歪んだ。

「早くしないと手遅れになる……。急いで一夏を連れ戻さないと……」

彼女の口から出る言葉は、その握り締めた拳と同じくらい震えていた。事の重大さを、ようやく全員がラウラと同じ高さで理解した! パーツと光の粒子が弾けて、すぐにそれは漆黒の機体へと変わる。

『あたし、一夏を連れ戻してくる!』

『鈴さん、わたくしも一緒にたしますわ!!』

すぐ横にブルーメタリックの装甲が姿をみせた。

『いくわよ……』

『ええ！！』

二機はスラスタの推力を全開で飛び立って行く。
見送るラウラと箒。

その横で簪は、六枚の空中投影ディスプレイを呼び出し大量のデータと膨大な量の数字を相手にすでに戦い始めていた。

「夏は他の専用機持ち達同様、状況を飲み込めずにいた。

なぜなら白式のセンサー、あらゆるチャンネル、何を開いても彼女が存在を示すシグナルがどこにも見当たらないからだ。

『何でどこにもないんだ！ 一体、どうなってるんだよっ?!』

コア・ネットワークのことは授業で聞いたのを丸暗記しただけなので、理論やらなにやらすつとばして『ISの操縦者はどこにいてもすぐに見付かる』くらいの認識しか持っていない。

けれど、ないのだ。シャルロットの反応がどこを探してもない。確かステルス・モードというのがあって、というのは聞いたことがあるが、それだつてシャルロットが自身の意思でそうしない限り発動するものではないはずだ。この状況でシャルロットがステルス・モードを使う理由はまずない。

『シャル、どこだ……』

周辺を映す画像センサーからの映像は、どの角度もほぼ最大望遠を表示している。けれどISはおるか、一機の飛行機や一隻の船だつてそこには映らない。

『クソッ、どこにいるんだ、シャルッ！ ……白式、なんでお前も反応しない!!』

一夏は苛立ちの矛先を白式に向ける。それが何の意味もない行為だと頭ではわかっていても、そうでもしないともう感情が暴走してしまつて、あつという間に思考を飲み込んでしまいそうなのだ。

辺りは一面、青一色。

海と空の境目までくつきりと見えるのに、一番大切な人の姿だけが見えない……。

苛立ちと不安が混ざりあつた苦い表情をする一夏。焦りが彼の判

断力を鈍らせる。

可能性からいえばかなり低い陸の逃走経路を捜すべきか、それとも海上の捜索範囲を広げるべきか？ そのどちらを選択したとしてもリスクはある。広範囲の捜索など、本来たった一人で行うものではないのだ。より遠くまで手を伸ばせば、狭い範囲しか見渡せないより広くまで手を伸ばせば、自ずと浅くまでしか目は届かない。

捜せる範囲より捜せない範囲のほうが広い捜索なんて、結果は火を見るより明らかだ。だが、他にもっと有効な手段があるわけもなく、そして何もしないでたつて時間はどんどん過ぎていってしまう。

こうしている間もシャルロットの身は危険に曝されているに違いなかった……。

「……こつちか?! 白式っ!」

自身の勘を頼りに向かう先を定め、スラスターを開く。

例えば可能性がわずかであっても、彼女を思う強い気持ちがある奇跡を生んでくれるのではないか、と心のどこかで祈ってしまう彼に罪はない。

が。現実にはたつたそれすらも許してはくれない。

ピーツ、と警告音が鳴る。センサーの数値がちょうどゼロを示す。緊急時だったから、ISスーツは粒子変換で呼び出していた。バスを抱えて二度、往復した。みんなと合流した場所から一人飛び出し、何度もイグニッション・ブーストを使った。当然、エネルギーは消耗しきっていた。

「なっ?! ま、待ってくれ、白式! 頼む、まだ行かないでくれ!」

一夏の叫びは、しかし届かない。

あつという間に粒子の粉が散ると、白式は待機モードに変わってしまう。

そして支えを失った一夏は、海上30m程から垂直に落下する。

「クッソオッー! シャルーツ!」

夏の目に飛び込んだ。

「バッチーン!!」

「なっ……………」

頬に鋭い痛みがはしる。一夏は呆然として鈴を見た。

『あんだ、あの子のカレシなんでしょ?! なら、わからないッ?』

こんなときあの子がビービー泣きながら、あんだの助けをじっと待ってるだけだと思う? さっさと諦めて覚悟を決めちゃってるんでも思うっ?!』

「あ、いや……………」

『……………そんな弱い子じゃないでしょ。きつと必死になってあたし達に居場所を伝えようと、今も戦ってるはずでしょ。そ

れがシャルロットって子、じゃないの? あんただって、そんな彼女だから好きになったんじゃないの?!』

「……………」

一夏はもう一言も言い返せなくなってしまった。つまり鈴の言うところは、全部がその通りだったからだ。ただただ、自分が情けなく思えてくる。

「鈴……………すまない、俺……………」

『あんだが』

そう言つと、鈴は顔を背けてしまふ。そうしてちよつと言いつらそうに言葉を続ける。

『あんだが しっかりしなきゃ、ダメじゃないのよ!』

「ああ、そうだな」一夏は、ようやく少し冷静さを取り戻し始める。

『昨日やそこらで恋人同士になったからっていい気になってんじやないわよ?! あたしなんて、もう二年もあの子の親友やってんだからね。こんなことであの子を不幸にしたら、あたしが絶対許さないわよ!』

一夏は顔を上げる。そして真っ直ぐ鈴の瞳を見据えて、答えた。

「ああ。わかつてる」

『ふんっ! わかつたんならっ、……………戻るわよ』

そう言って鈴は速度を上げ始めた。
次第に、視界に小さく青い機体が見えてきた。

ワルキューレを怒らせた。

俺は今、この息苦しい雰囲気じつと耐えていた。誰も、一言も喋らなかつた。

真正面に立つ銀髪の美しい女神は、さっき一言「お前というやつは、本当に……」まで言ってから、肩をわななかすばかりで次を喋ってはくれない。と、いうよりたつた今も口から溢れ出てきそうな怒りの感情を抑えるのに、彼女はすべての言葉を一旦封じる必要があったのかもしれない。多分、口を開けば一言目も二言目も『怒り』なはずだ。

眉に皺をよせて口を真一文字にした抑えきれない憤怒の表情は、こんな時にいうのもなんだがとても整っていて美麗で、「美人つてやつはどんな表情でも様になるから得だよな」と思う。だけれどこんな時だからこそそれを口にしたら最後、もう立ち上がれないくらいに打ちのめされそうなので、今、言うのは止めることにする。

そういえば我が家にはブリュンヒルデもいた。本人はそう呼ぶと嫌がるが。

彼女もまた一日の大半を怒っているような気がする。戦乙女達はそういう気質なかもしれない。

……などと、一夏はちよつと浸ってみる。

鈴にひっぱたかれた頬が痛い。

帰ってくるなり、おんなじところを一発ラウラにぶん殴られた。こっちは拳だったから、痛みの質は『ヒリヒリ』から『スキスキ』に変わっていた。それっきりラウラは、額に出来た血管マークをピクピクいわせたまましばらく黙りこくっている。

一夏は、自分の考えなしの行動については十分反省していた。

「ただそれはおいて、今はすぐにでもシャルロットを探しに行かなければならない。それにはみんなの協力も必要だと思っただが、
「な、なあ、ラウラ。そろそろシャルを探しに、だな……」

「……フンツ！！」「……」
金と銀とツインテールが、凄い形相で一夏を睨みつけてくる。

「う。……」

彼女達は取り付く島がない。それで一夏は身を小さくするしかなかった。

誰一人、言葉を口にしない。腕を組み、口を一字にし、足元を見つめる。

夏の日差しが暑い。

多くの学生達がそれを避けるためにバスの陰で待機していた。怪我人の治療や、各車両の故障のチェックが今もお行われている。バッテリーの浪費を避けるため、生徒達には今、一時車外待機の指示が千冬から出ていた。

指示を出した後、千冬達教師陣はちょっと離れた一角で何かの打ち合わせを続けている。

その教師達からも、また生徒達が集まっている所からもちよっと離れた場所に、一夏達専用機持ちの輪があった。日差しを避けるため、樹齢数十年くらいだろう大きな松の木の下に集まっていた。針葉樹の葉の編むメッシュの間をくぐり抜けてきた光のシャワーが、ときどき目に入って眩しい。

タタタツ、タツ！ と小気味よく響いていた音が急に止んだ。

それはさつきから一夏の斜め後ろでひっきりなしに続いていた音だ。そして「ふう」と小さく深呼吸するのが聞こえた。途端に、腕組みして俯いていたラウラ達の顔がガバっと上がった。

「どうだっ?!」

我先に口を開いたラウラの視線の先に、やや神妙な面持ちがあっ

た。考え込んだ時の癖らしい、あの右の人差し指の腹をあまがみする素振り。たつぷり一呼吸分の時間を考えた後、彼女　　簪は答えた。

「……多分、間違い……ない。きっと、今は……海の中だと思う」

「やはりッ！　ならば、逃走は潜水艦でか？」

「……おそらくは。ISの可能性は否定できないけれど……80%以上の確率でNOだった……」

「そうか。……みんな、集まれっ」と、ラウラが全員を呼び寄せる。その声にさつきまで身動き一つなかった面々があつという間に距離を詰め、ラウラの周りに円をなした。「えっ？」と戸惑う一夏は、出足が遅れたせいでその中に入りそびれてしまう。そんな一夏を「ぼやっとしらない！　さっさと来なさいよッ！！」と鈴が腕を引いてせつついた。

ラウラは一夏が輪に加わる時間も惜しい、といった表情だった。鋭い目で睨みつける。一夏は何だかよくわからないまま、場の空気にも馴染めずに居心地の悪い気分だ。

「いいか……」

ラウラが話し始めた。

「私の言うことのほとんどは推測だ。だが他に発見の手立てがない以上、これを唯一の事実と考えて私達は行動する。他の一切の可能性は考えない。……いいな」

一同は首を縦に振った。一夏もちょっと遅れながらもそうする。

「……シャルロットは拉致された。犯人は今のところ8名、確認されている。しかし逃走ルートを確認していた人員も考えれば二桁はいるはずだ。そして現在はおそらく……」

そう言っラウラの投げた視線を受け、簪が空中投影ディスプレイの一枚を輪の中心、全員が見える場所に展開し直した。そこには地図が映っていた。九州、四国辺りを中心にした日本近海の地図だ。そしてその地図には沖縄の更に西の海を中心とした大きな円が書かれている。

そこを ラウラが指でぐるつとなぞった。

「……この中のどこかにシャルロットはいる」彼女は静かに言った。
「なっ?!」と一夏が息を呑んだ。そして「ほ、本当かつ、なら……」
言いかけた言葉をラウラが遮る。

「一夏、黙れ。今は一秒でも惜しい。黙って聞けないのなら、席を外せ」

彼女は鋭い声で一言言った。

しかし、そうはいかない。事はシャルロットの問題で、自分は誰よりも必死なのだ。それを「黙れ」などと、たとえラウラだとて許せない！ 一夏がカツとなって睨みつけたラウラの目は、

自分なんかよりももつと真剣だった。いや、一夏が真剣でない訳はないし、『もつと』というのはちよつと違う。ただ、真剣さの密度が自分なんかの比ではないと、一夏は感じざる負えなかったのだ。

ラウラの目は、見たこともないくらい深い色をしていた。立ち入ることも、触れることもできないくらいの緊張感が、その目の光から感じられた。

一夏は口を閉じた。それでラウラも彼から視線を外した。

「それにしても、かなりの範囲ですわね……」

セシリアは自身の予想以上だ、と言わんばかりに眉間に皺を寄せて言う。

「……ゼロに近い情報からの……確率予想だから。これでも本当は狭いくらい……ただ、」

そう言つて簷はラウラを向く。ラウラが小さく頷いて言葉を続ける。

「ああ。それ以上は我々のスペックを使い切つても索敵不可能だ。だからその円の海域にいると信じ、行動するしかない」

「うん、……確かにそうよね」

鈴はそう言うと、ふうつと肩の力を抜いた。そして振り返ると、簪を向いてウインクしてみせる。

「あたし、信じるわ。『IS学園の頭脳』、更科簪の導き出した答えなら……きっと間違いないもの」

その言葉に、思わず簪は頬を赤くする。

いつもだつたら照れ隠しに俯いてしまう彼女は、けれどその時は違っていた。鈴の事をジツと見つめ返して、小さくコクリと頷いたのだ。鈴はそれを見て、自分がなんだが嬉しい気持ちになっているのに気が付いた。口角をいっぱい上げて、簪に向かって笑ってしまった。

信じる、といった自分の言葉が本当の意味での確信に変わっていき気がした。

「みんな……」

ラウラが低く響く声で呼ぶ。

彼女の声を聞いた全員が、すつと押し黙って彼女の顔を見た。全員、すぐにまた緊張の面持ちに変わっていった。それはまさに皆がラウラをリーダーと認め、信頼している表れでもあった。

一人一人の顔をぐるっと見回してから、ラウラはゆっくりと口を開いた。

「……どういう方法かはわからないが、敵はシャルロットのシグナルを消すことに成功している。この意味をもう一度、正しく理解すべきだ。相手は人類初の『人対IS』の作戦を実行するため、周到な準備をしているのだ。気を抜けば、簡単に逃げられてしまう……」
全員の緊張感が増すのがわかった。ラウラが『逃げられて』の一言だけあえて声色を下げたのだ。そして全員の頭の中にそのことと同義のもう一つの『現実』が、彼女が言葉にして発しなかったことで逆に深く刻み込まれる。

そうなれば、もうシャルロットは戻らない。多分、二度と。

「だが、私は自分の力を信じている。無論、学園生活を共にしてきたお前達の力も、だ。だから全員が力を出し切れれば必ず作戦は成功すると確信している」

そう言うと、ラウラ・ボーデヴィツヒはほんの少しだけ笑みをみせた。それが見る者の自信と団結につながると知っているのは、さすがリーダー経験者だった。否応なく、全員の士気は高まった。

「さあ、いこう」

ラウラの言葉で全員がISを展開した。幕が広げた絢爛舞踏・アンリミテッドの大輪が、作戦開始の合図となった。

気が付いたときには無機質な造りの部屋に押し込められていた。

天井は低く、明かりはついていないものの檻や牢屋を想像させる異様な圧迫感のある部屋だった。

しばらく周囲の様子を伺っていると、その部屋は何かの乗り物の中なのだ気付く。低く唸るエンジンの音。どのくらいの速度かはわからないが前進しているのを体のどこかが感じている。

空気が悪い。気持ちが悪い。

人いきれが圧縮したような不快な酸素。吸い込むだけで喉にも肺にもねっとりまとわりつくような異質感を覚える。ここが世界のどこなのかはわからない。けれどここが何の中なのかは、それでシヤルロットにはわかった気がした。

(潜水艦……?)

こんな事態に陥っても案外と冷静な自分。だが、こういう事態はもうずいぶん前から予想していたのだ。

いや、『覚悟していた』と言つべきなのだろう。

モアノーの設計データと引き換えに自由国籍の権利を得た時からいつかはこういうこともあるだろうことは認識していた。だからその時のため、とモアノーのプロトタイプ機を取引の対象にも入れていた。何かあっても自分にはISがある。自分を守る術がある。と。

結果がこれだ。抵抗することもできずに拉致された。おまけにどうやらISを起動することはできないらしい。さつきから自分の意思にモアノーが反応しないのだ。待機状態のモアノーはネットクレスのまま彼女の首にかかっているから、何らかの方法でISを沈黙させられてしまったのだろう。そしてシャルロット自身も手錠のよう

なもので後ろ手に拘束されていた。よくは見えないが、かなりしっかりした拘束具だ。おそらく解錠は不可能だろう。

それでも、落ち込んではいられない。どうにか脱出する方法はないだろうか？

室内を見回してみる。窓はなく、扉が一枚だけ。あとは何もなし。本当に何もなかった。

(女性に対する待遇としては最悪だね。失礼しちゃうよ……)

シャルロットは頬を膨らませた。思ったとおり、残念だが脱出は難しそうだった。

ふと、頭をよぎる顔があった。その姿は次第に頭の中で色を帯び、形を成していく。だけど今はダメだ、とシャルロットはそのイメージを頭の中から無理矢理追い出した。多分、今、その顔を思い出し、しまったら心が弱ってしまう。頼りたくなってしまう。すがりたくて、泣きたくもなってしまうかもしれない。だから、今はダメだ。心を強くする。絶対に脱出すると念じる。

会うために。その顔に、シャルロットにとって一番大切なその人に会うために。

「一夏……」

彼女は敢えてその名を口にした。必ず生きて再会すると、固く誓うためにも。

今回のシャルロット救出において、セシリアが任された役目は他の専用機持ちと比べても何より重要な役目だった。そして、そことは彼女自身が一番よく自覚していた。

彼女は今、海上十数m上空にじっと佇んでいた。目を閉じ、静かに息を潜めて。

「この作戦においてセシリアの役割は何より重い。つまりは、『お前の失敗は作戦自体の失敗を意味する』ということを理解しろ。…悪いが重責を負ってくれ」

ラウラは作戦の全容を皆に伝えた際、セシリアに向かってそう告げた。そして申し訳なさそうな顔もした。

初めて見た顔だった。ラウラ・ボーデヴィツヒがあんな顔を見せるなんて思わなかった。そしてその印象がセシリアの胸深くまで刺さっていったおかげで、彼女はいつもの高飛車なセリフがでてこなかった。

「ご期待に添えるよう、精一杯尽くしますわ。必ず、この大役を果たしてみせましてよ」

「頼む……」

彼女を送り出すラウラの顔がずっと目の奥に焼き付いている。あの右目が、あんなにも真剣に自分を見ていたことなど、これまで一度もなかった。

セシリアが今いるのは、簷が示した探索エリアのほぼ中心。沖縄の更に西の海上。

『さあ、ティアーズ達。わたくしとあなた達がどれだけ有能か示す時ですわ』

そう言うときセシリアは24機すべてのブルー・ティアーズを開放した。その一機一機を我が子のように愛でるセシリア。この作戦の成否は彼女に掛かっていて、彼女がその任された役割を成功させるためには彼らティアーズ達がどれだけ期待に応えてくれるかに掛かっていた。

これまでに、訓練を含めたとして経験のないアクト。一抹の不安はある。だが

『行きなさい、わたくしのナイト達！』

彼女の呼号を受け、ブルー・ティアーズ全機が散開する。それを

見送る瞳が強い決意を持って輝く。

必ず、見つけ出すと。

ブルー・ティアーズ達は作戦海域全体に広がっていくと、それぞれがセシリアの指示による所定の位置で海上に着水した。海上にブイのように浮くティアーズ達。そして彼らはBTビームを海中に向け最少のエネルギーで発射する。当然、水の抵抗によりビームはすぐにかき消されてしまうが、その衝撃波は微弱ながらも海中に向けて進行する。その波動の変化を各ティアーズのセンサーから受け取ったセシリアが即座に解析する。

何度も何度もティアーズ達はビームを発射し、そのたびに送られてくる24機分の膨大なデータにセシリアは意識を集中する。彼女が今やろうとしているのは、海中を進行しているだろう潜水艦を探し出す事。ブルー・ティアーズを武器としてではなくソナーとして使う初のタクティクスは、成功すればBT兵器の新たな運用方法を模索することになるだろう。

成功すれば。

セシリアはじりじりと顔を覗かせる焦りと不安を必死で押さえつけながら、おびただしい量のデータと戦っていた。

自分が失敗すれば、シャルロットを失う事になるだろうという恐怖とも。

鈴が今居るのは、セシリアが行動する場所からはるか上空だ。

彼女に与えられた仕事は、セシリアが見つけたターゲットを海上に引っ張り出すこと。ただ、それだけ。

言葉にすれば単純だが、実際の作戦行動は『臨機応変』の一言でしか表せられない。発見場所、水深、速度、その他全く不明なモノを素早い判断でどのようにして捉えるか。それは確かに鳳鈴音にし

かできないことなのかもしれない。冷静な判断、柔軟でときに大胆、ときに慎重な彼女だからこそ任せられるのだ。

鈴はチャンネルを開き通信を送る。

『そっちはどう？ 準備はOK？』

それに応える簪は、自身の立案した作戦にも関わらずやや困惑気味だった。

『……OK、だと思う。……大丈夫、やれる……』

スペック上は可能な筈。ただ、過去に前例はない。

更識簪は今、人類史上初のIS水中稼働に挑んでいた。慣れない抵抗と水圧。センサーが幾つか上手く作動しなくなった。それに自身も未知の空間に戸惑いを隠せないでいる。

確かに宇宙での活動を目的に作られたのがISであり、空気のないところや特殊な環境にも耐える機能を有してはいるはずだ。けれども動かすのは人間であり、17歳の少女である。そこにはまだ未成熟の心しか入っておらず、人が感じる不安や恐怖に対する耐性というのはISのスペックには搭載されていない。

それでも自分の立てた作戦への責任感や、大切な友人を救いたいという思いは少女を強くする。それはISが持つ性能を越えた『人の可能性』でもある。

簪は自分自身を信じて勇気を振り絞る。そして打鉄式は海中をゆっくりと前進し続けた。簪の役目を、鈴と協力して標的を海上に追い出すために、セシリアから発見の報告を暗く深い海の底で待ち続けた。

一夏、箒、ラウラの三人が向かう先は、南太平洋・ポリネシア諸島。オーストラリアやニュージーランドの遙か東である。

そして彼らが飛ぶ現在位置はグアム島の北800km辺りの上空。スラスターをほぼ全開にした高速飛行で目的地を目指している。

天候は快晴で雲ひとつない。見渡す限り世界は蒼一色であった。しかしいつもであればそんな美しい景色に目を奪われるはずの一夏であっても、今この瞬間においてはそんな景色も目に入れど心には響かずにいた。

「ラウラッ！ 一体どこまで行くつもりだ」

一人行く先を告げられなかった一夏は、白式をシュバルツァ・レィゲンに寄せて話しかけた。

「俺達もみんなと協力してシャルを捜すべきなんじゃないか?!」
しかしラウラは視線を正面に向けたまま答える。

「我々のISは搜索に不向きだ。仮に我々が標的を見付けたとして、沈没させることは出来ても捕えることは難しい。大体、お前などぶった斬るくらいしか思いつくまい?」

「なあ?! ……ッ」

何か言い返そうとした一夏だったが、結局言葉は出てこなかった。彼は悔しそうに目を逸らした。

「安心しろ。お前には元々、期待していない」

そう言ったラウラの機体エネルギー残量が、とうとうレッドゾーンに入ったことをセンサーが示した。ほぼ全速力の飛行を続ける三機だ。当然、エネルギーの浪費は激しい。

「箒、頼むっ!!」

ラウラがそう叫ぶと、紅椿から金色の光が舞い散る。箒のワンオフ・アビリティー、絢爛舞踏・アンリミテッドの力が再びラウラとシュバルツァ・レィゲンに前進する糧を与えたのだ。さっきから幾

度となくこうして、休むことなく飛び続ける三機のIS。

「しかし、ラウラ！ 俺にはわからないんだ。何故、俺達はこんなに日本から離れてしまっている？ 本当にシャルはこっちにいるのか？」

「いや、おそらくこちらにはいない。本命は向こうにいるはずだ」
そう言っただけで視線をセリア達のいる方角に向けるラウラ。

「なっ？！ じゃあ何で俺達はこっちに！ 今すぐ戻って搜索を…」

…

一夏はシュバルツァ・レーゲンの肩に手を掛けてラウラに直談判するのだが、彼女はその手を払い除け、決意を持った目で一夏を見返すのだ。

「一夏。私の言うことを聞けないのなら、シャルロットはもう戻らんぞ」

「クツ！ しかし…」

歯を食いしばり一夏は呻いた。大切な者を思う心が真つ直ぐなだけに、すぐに何かとぶつかってしまう。頭では分かっているのだ。

おそらくラウラの行動は正しい。ただ納得しようにも確信がなくてそう出来ない。言われるままに行動するしかできない自分が、腹立たしいくらいもどかしい。

そんな煮詰まった様子の一夏を見て、ラウラは嘆息した。少しは成長したかと思っていたが、相変わらず思いばかりが空回りするこの男。納得させるには、やはり自分がリスクを負うしかないのか…。

ラウラは一息吐くと、やがて決意の表情になって呟いた。

「一夏。…これから私が喋ることをお前の胸にだけ残せ。データには残すな。音声センサーも切れ」

「えっ？」

「いいから。早くしろ」ラウラに急かされて一夏は、慌てて白式の音声に関するすべてのセンサーをカットした。途端に、耳に届くのは風を切る轟音とスラスタからの爆音だけになった。

「うわっ」

まずその音に驚いた。けれど次の驚きはその何倍もだった。ラウラが急に一夏の首に腕をまわし、抱きついてきたのだ！

彼女の顔が自分の顔のもうすぐ近くまで接近してくるのに、一夏はびっくりして大声を上げた。

「バツ、ラウラ、お前っ！ まさか、こんなときにキスッ?!」

そう叫んだ一夏に、

『ゴンッ!』

ラウラは舌打ちと共に右のゲンコツをくれてやった。

「バカはお前だ。私はそんなに安い女ではない!」

フンツと鼻を大きく鳴らしながら、ラウラは再び一夏の首に腕をまわしてくる。しかし今度の彼女はさつきと違った。力一杯に腕を締め上げるものだから、堪らず一夏は「ぐえっ」と苦しそうな声を上げた。その耳元まで唇を近づけたラウラが、ほんの小さな声でほそつと一夏に呟いた。

「報いだ。馬鹿者……ッ!」

ギリギリギリギリ……とすごい音で白式の装甲が悲鳴を上げた。もちろん、操縦者の方はもつと大きな悲鳴を上げた。

しばらくお仕置きとおぼしきフルパワーが続き、ようやくそれから開放されてもラウラは一夏から離れなかった。

「ラウラ、もういい加減に……」

げんなりとした一夏がラウラを振りほどこうとすると、逆にラウラは腕に力を込めて、そして一夏の耳に向かって話しかけた。

「いいから聞け。こうでもせんとこの轟音の中、話せんだろっ?」

「あ。なるほど……でも、それならセンサーを」

「一夏、黙って聞け。これが私の口から出た言葉だと、データに痕跡が残っただけで国際問題なのだ。だからわざわざこうしている。いいか、黙ってよく聞け」

「あっ、ああ」

突然『国際問題』なんて物騒な言葉がでてきたものだから、一夏も急に身を引き締めた。そしてラウラの次の言葉を待った。

「一夏、おそらく今回のシャルロット拉致は」

「ゴクッ」

フランスが当事者だろう

「なっ、ナニ?!」

「まず、間違いはない。私は確信している」

ラウラの言葉に一夏は耳を疑った。そんなはずは、と同様を隠せないでいると、ラウラが続けて彼女の見解の理由を話し始めた。

「あの国はシャルロットの能力を熟知している。ISパイロットとしての適正、技能。彼女個人の戦闘能力。そして」

ラウラの右目が一夏の目を覗き込む。

「知っているか、一夏。欧州連合の次期主力機にラファール・モアノーが選ばれたのだ」

「えっ?! ほ、本当かッ! すごいじゃないか、それってシャルの……はっ」

「そう、つまりはそういうことだ」

ラウラはそれまでじつと見つめていた一夏の目から視線を逸らせた。視線はじつと海面へ注がれる。この世界のどこか。この海と続く暗い深海にいるはずの彼女の顔を思い浮かべる。そして

「シャルロットの能力は高すぎたのだ。パイロットとしてだけではなく、開発者としても。自由国籍の彼女は、今や引く手数多の立場。このIS世界のなかだけで言えば、篠ノ之束と同じレベルのSS級超重要人物なのだ」

「なっ……」

そこまで聞いて一夏は臃げながらコトの輪郭が見えたような気がした。

自国から離れた人物。シャルロット自身の希望でそうなった以上、再び戻る可能性は低いだろう。その能力を知っているならば、それが他国に渡ればどれだけの脅威になるかも熟知しているはずだ。ならば無理矢理取り込むか、それができなければ。

「シャルの命がッ！ そんな……そんな事、絶対に許せない！！」

「一夏。これは国家の威信や、もっと大きく言ってしまうえば自国の安全のためとも言える。私も軍属だ。お前のように真っ直ぐに否定は出来ない。……だが、本当はお前にも原因の一端があるのだぞ？」

ラウラが一夏の胸を指で小突いて言う。一夏はその一言がうまく飲み込めない。

「俺に、原因が？ ……何故だ！！」

ラウラに詰め寄る、一夏。しかし、ラウラにしてみれば気抜けさせられた気分である。

「ふう、この男はそういうところが抜けているというか。まあ、そういう人間だから、シャルロットもまんまと当てられたのだろうが……」

冷笑し、聞こえないくらいで呟いたラウラに対し、一夏は苛立ちを隠せず捲し立てた。

「ラウラ、はつきり言えッ！ 一体、俺の何がシャルを危険に晒したと」

詰め寄る一夏の顔を無造作に押し返した。そして呆れたような口調でラウラは答えた。

「馬鹿者。お前があいつの自由を望んだから、あいつは必死になつてお前のためにそれを勝ち取ったのだらう？ それで自分が負うリスクを、自分だけが背負う覚悟までして、だ」

「えっ?!」

「考えてもみる。学業の片手間に第三世代兵器を設計してしまうような女だぞ。自分がデュノア家を出るために『何をどれだけ』代償

として払わなければならぬくらい、わかっていて当然だろう？
それをあいつは、ヒトの嫁にうつつを抜かして、のぼせ上がって
その上……あるうことが自身を見失ったのだ！ 全くもって、世話
の焼ける愛人だ……！」

「は、はあ……？」

そう言ったラウラは急にバンツ、と両手で一夏を突き飛ばした。

漆黒の機体は白銀のそれから距離を取る。そしてシュバルツァ・
レーゲン側から強制的に白式の音声センサーが継れた。ラウラの声
がいつものように回線を通して聞こえてくるようになる。

「いいか、一夏！ シャルロットは私の一番の友人であり、そして
私にとっては唯一の家族だとも思っている。必ず、助ける……。そ
のために我々はここでやらなければならないことがあるッ……！」

『ピーッ！』と、突如センサーにエマージェンシーのシグナルが
点滅する。

ハイパーセンサーが示すのは数百km離れた場所からこちらに向
かってくる影。最大望遠の映像に映るのはネイビーグリーンシル
エットだ。

正面の空域から迫るシグナルは最初一つだった。しかし次の瞬間、
それは八つに増えた。そして素早く散開する。

「知っているか？ 『フランス領ポリネシア諸島・タヒチ』。……
おそらくあそこが奴らのゴールだ。そして我々の救出作戦を阻むの
が、次期欧州連合主力IS『ラファール・モアノー』。リヴァイブ
を半分以下の換装と調整で第三世代型に『ヴァージョン・アップ』
してしまうあの機体は、汎用性と量産性に優れた現在最強の兵器だ
……！」

「クッ！」

一夏は歯を食いしばった。まさかこんな形で、最愛の人の努力の
結果と向き合うとは……！！

ラウラの怒号のような声が耳に響く。

「絶対にセシリア達の元には行かせるなッ！ 必ずここで食い止めるぞー！！」

シュバルツァ・レーゲンのレールカノンがセーフティを解除した。ラウラは左目の眼帯を早くも外し、全力でこの戦いに挑む決意をを現わにする。

「行くぞ、二人ともー！！」

「うおおおおー！！！！」

一夏は雪片式型を構え、スラスターを全開にして飛び出す。自身の戦いの意味を理解した今、彼は最愛の人から遠く離れたこの場所で、彼女を救うべく戦うことになる。

「ちょっと……。何してのよ、あんた達……」

鈴がさっきまで組んでいた腕を解いて呆然とした声で言った。

今、遠い空で起こっているそのことは、彼女にはあくまでコア・ネットワーク上のシグナルでしか認識できない。

けれど、3対8。

IS同士が飛び交う様子はセンサー上で見れば『点と点』が重なり合うだけだ。そして、ふっ……とシグナルが一つ消えた。3対7

「あんた達、何してんのよ！　そ、それじゃ戦争でしょ？！　ねえ、一夏あー！」

鈴が爆発する感情を抑えきれずに甲龍のスラスターを開こうとした。しかし

「ダメよー！！……鈴、行っちゃダメ」

強引に視界に割り込むように、センサーの正面に簪の厳しい表情が映った。

「簪っ！　なんで？　だって、こんなのおかしいじゃない？！　訓練じゃないのよ、それにゴーレムみたいな無人機でもない。人と人が戦って……こんなじゃ、ただの戦争だわ……！！！」

鈴はセンサーのビューに映る簪に噛み付くみたいにして精一杯訴えかける。けれど簪の表情はまったく変わらない。「あんた、何とも思わないの？」鈴のその言葉にさえ、彼女は表情を曇らせない。

「鈴、わかって……。ラウラ達は今、……私達がシャルロットを発見するための時間稼ぎを……してくれている。でも……三人は今、フランスの正規軍と戦っているの。それに領空侵犯の可能性も……ある。私達が行っても行かなくても、……ラウラ達の扱いはテロリスト……」

「なっ？！　じゃあ、どうすればいいの？　このままじゃ三人とも

……」
鈴は顔面蒼白になって唇をわななかせた。

ISは絶対防御があるから、操縦者が死亡することはないはずだ。ただ、もし捕まれば一夏達はテロリスト扱い。どのように裁かれるのかはわからないが、最悪の場合

「簪、あたし無理よッ！ 行かせて、お願い！！」

鈴は懇願した。目に何か滲んでいた。「誰かより誰か」なんて選ぶのが良くないのはわかる。けど他の誰かを助けるために、一夏が

「嫌だッ！ あたしは一夏がそんなふうになるのを黙ってみてられない！！」

「……鈴っ！！」

甲龍の脚部スラスタが全開で開かれる。急激に温度が上がったために、燃えるように真っ赤になっている。鈴はキツと空を見た。そして、今、まさに飛び立とうとするっ！

その目の前に、青碧色の影が飛び込む。

『ヒュンッ！！』

「なっ……」鈴はその鼻先に突きつけられたブルー・ティアーズの発射口に睨まれ、二の足を踏むことになる。

そして聞き覚えのある軽やかな声が、この緊迫した状況の中でもいつもと変わらない調子で言うのだ。

「ちょっと、いい加減にしてくださいまし？ お二人が騒がれると、

わたくし集中できませんわ」

「セシリア！ ……あんたッ」

鈴が自分のほぼ真下で、今も海中搜索を続ける蒼い機体を鋭い目で睨み付けた。

「今、あたしに刃向かうんなら本気でぶっ殺すわよ！！」

思考が感情が追い詰めてしまう切迫した状態だった。冷静な判断

なんて、まるで出来ない。だからきつと無意識での反応だったのかもしれない。

鈴の行き過ぎた反応。龍砲がその蒼いISをロック・オンしてしまっただのだ。

セシリアはセンサー越しに鋭い視線を返した。鈴は、それで今にも龍砲を発射しようとしていた……。

「……わたくしを撃つて、一夏さんのところへ行つて、それで解決すると思いでして？ もしそうなら、そのおめでたい脳みそに免じてここは見逃して差し上げてよくつてよ？」

「セ、セシリアああ！！」鈴の唸るような声が響く。

「……でも。わたくしはそうは思っておりませんわ」

「な、なんですつてえ?!」

セシリアが視線を鈴からそらし、コバルト・ブルーの海に下ろす。

「わたくしだつて、一夏さんを助けたい！ わたくしだつて……直ぐ様飛んでいって、一夏さんをお守りしたいですわ。でも、それでは彼は救えない。あのお方を真にお守りするには、この戦いを『先に』仕掛けてきたのが一体どちらなのか証明する必要があるのですわ」

「えっ……」

「もしもこの争いが先にあちらから仕掛けてきたものだとな証明できれば、あちらのたった戦闘行為が実は隠蔽工作のための物だと証明できるはずですよ」

「あ、ああ……」

鈴がセシリアの考えを理解して、そして言葉を失った。

シャルロットを救い出す。そうすれば結果的に一夏の無実を晴らすことも出来るはずだ。国が正規軍を動かして戦闘まで行なったのが、実は一人の少女の拉致作戦の支援だった、なんて諸外国に知られるわけにはいかないはずなのだ。

三人が無言になって、それぞれが自分の心を沈めるみたいに俯いた。そうすると耳には静かな小波の音が届くのだ。ザザー、ザザ

ア、つと穏やかに胸のうちを洗ってくれる。その海の青が、熱くなつた頭をすつと冷ましてくれる。

「わたくし、まだ一夏さんのこと……諦めきれませんわ」
急にセシリアが呟いた。

「だつてあんなに素敵な男性、他にいないですわ。あんなに信頼の
できる人、他にいないですもの」

ちよつとだけ微笑んだセシリアの顔は、気丈にみせるつもり
の彼女とはちよつと違って寂しそつだつた。けれど呟いた一言は、
この場にそぐわない内容なのに三人の心を一つにしてしまう魔法の
言葉だつた。

「わたくし、このような作戦の中核を担う大役を任せてくださつた
信頼に応えたいのですわ。一夏さんのために……。だから今、わた
くしは自分が求められていることを全うしてみせますわ！」

「うん……ごめん、セシリア」

鈴がセンサー越しに頭を下げた。

「あたしも出来る事、何でも手伝うわ。遠慮なく言つてね」

セシリアの顔に、今度はまっすぐな微笑みが映る。簪も、鈴も、

三人がセンサーを通じて笑顔で頷きあつた。

「……でしたら、鈴さん。まずはこのロックを解いて欲しいのです
けれど……。さつきからアラートがうるさくて堪りませんわ」

「あ、あつ！ご、ごめん！！」

簪がそんな二人の滑稽なやりとりを、くすくすと吹き出していた。
そうしていつの間にかその空気は三人全員に伝染して、最後はみ
んなが笑い出していた。

「ふふふ……」

「ちよつと、ヤダつ。そんなに笑わないですよ？」

「クスクス……」

眼下にはどこまでも広がる海。けれど、必ず見つけ出す。彼女達
はあらためて気持ちをひとつにした。

荒っぽく部屋から引つ張り出され連れていかれた場所は、『やはり』と自分の考えを肯定する潜水艦の操舵室だった。細くて奥行きがあり、天井の低い迫っ苦しい空間に、何人もの男が仏頂面で座っていた。

シャルロットは素早く目を走らせ、出来るだけ多くの情報を手に入れようとした。

しかしそれを察したのかどうか、浅黒い肌色の男が彼女の前にすつくと立ちはだかった。そのせいでシャルロットからはほとんどの計器類が目に入らなくなってしまうのだった。彼女は内心、舌を打った。

男は170cm台の後半くらいの身長。体つきは屈強、というほどでもないがよく鍛錬されているのはわかる引き締まった身体だ。髪をかなり短く刈込み、同じくらいの長さのあごひげを蓄えていた。年齢は30代後半くらいだろうか？ 背負っている風格のようなものでわかった。この男がリーダーだ、と。

「……僕を一体、どうするつもりなの？ どこへ連れていくの？」
シャルロットが訊ねる。その言葉はバスジャックの時に彼らが使っていた言語でも、IS世紀に入ってから世界基準になった共通語の日本語でもなく、彼女の『元』母国語だった。確信をもって、彼女はその言語を使って訊ねた。ほんの一瞬、男は驚いた様子だったが、すぐに彼もその言語で答えてきた。

流れるような抑揚。空気の抜けるような言い切り、語尾。彼は、そちらこそがネイティブであることをすぐに理解させるに易しく、言葉を並べる。

「驚いたな。よく私がフランスの人間だとわかったじゃないか。一体、何故？」

男の言葉にシャルロットは苦笑する。

「僕達フランス人の使う英語には特徴があるからね。低俗なものを
渋々使うような、そんな響きになる。……訓練が足りないんじゃない
かな？」

「ほう。それは、いい勉強をさせてもらったなッ！」
「グウウ！」

男は言葉を言い切らないうちに、シャルロットの腹を蹴り上げた
！ 後ろ手に拘束された彼女は、抵抗も身をかばうことも叶わずに、
まともにその制裁を受けてしまう。そして痛みに仰け反り、冷たい
床に顔を擦りつけて嗚咽を漏らした。

「……我々は、貴様の殺害も認める命令を受けている。口には気を
付けたほうがいいぞ？」

男は低く呟いた。

「時代のヒロイン。強く、気高く、美しい英雄。まるで天上人のような扱いを受ける貴様らIS乗りも、こうなってしまうばただの小娘か」

男は床に這い蹲るシャルロットを見下ろすと、吐き捨てるように言った。

「所詮はただの女。戦うことは出来ても、戦う意味を理解することなどできんだらうな……」

「何を……一体、僕に何をしたんだ?! モアノーをどこにやった!」

「フンッ!」

痛みに耐え、何とか顔を上げたシャルロットは、気丈にも男を睨まえた。

しかし男はそんな彼女の視線を鼻で笑うと、抵抗できないでいるシャルロットの髪をむんずと掴み、そして近くの壁に叩きつけた! 「ギャ、ンッ!」

短い悲鳴。少女の体は、軍人であろう男の鍛えられた腕に荒々しく扱われると、まるで小動物のように振り回され、投げつけられてしまう。そして、体はくたりと床に倒れ込む。

「う、ううっ……」

硬い金属の壁。身をひねることもできず、激しく打ち付けた額からは血を流し、シャルロットは弱々しく呻き声を上げる。

「絶対防御が効かなければ、その身のなんと脆いことか。精神も肉体も、戦場に出るための下地すら出来ていない小娘がおかしな自信やプライドを持つ……。全く、不愉快な時代になったものだな」

男は硬い靴音を響かせながら、シャルロットに歩み寄る。

そして、彼女の顎に手をかけるとグイッと自分のほうを向かせた。

「ア、ううっ!」

手荒な扱いに、再び鈍い叫びを上げてしまうシャルロット。しかし、男にしたらそんな彼女の様子もまた不快なものに映っているかのようであった。

「情けないな、IS乗り。一国を代表するエース・パイロットも形無しだ……。まあ、フランスの恥を晒す前に貴様が我が国を去ってくれたことは、感謝すべきかもしれないがな」

男は冷たい目で見下ろしたまま、シャルロットに向けて嘲笑する。必死で片目を開けるシャルロットにはその表情が見えているわけはなかったが、男の発する不快な空気は体中で感じていた。

明らかかな、敵意も。

急に、男は彼女の顔にかけていた手を放した。そのせいで支えを失ったシャルロットの身は、また無情にも床に叩きつけられてしまう。「ぐっ！」と嗚咽を漏らす。けれど、いい加減シャルロットのほうもこの扱いに慣れ始めてきていた。受け身くらいは取れるようになっていたので、さすがにまともに顔を打ちつけたりはしない。

だが、男の陰険な性質も理解し始めていた。無抵抗を装うほうが今はいい。そう考えたシャルロットは痛みに耐えるようにうずくまっていたふりをした。弱々しく、肩を震わせた。

男は、そんなシャルロットの真意まではさすがに気付かなかったようだ。弄び、力なく床に這い蹲らせた少女の様子に悦に入っているようだった。そしてそれ以上はシャルロットに手を出そうとはしなかった。

「モアノーさえ、……。あれば……」

シャルロットはぼそつと、悔しそうに言った。無念の一言が、情けなく床にバラバラと散らばるように呟いた。

男は、肩を揺らして笑った。

「情けないな。ISがなければ何もできないと、言っているようなものじゃないか」

「くっ、そんなんじゃ……。ない！」

「フンッ、どうだかな。……。IS乗りというヤツは、皆、まるで自

分が優れた人間のような顔をしている。さもエリートかのような立ち居振る舞いをする。……くだらない！！優れた兵器を与えられるチャンスがあっただけだ。自身が女に生まれたというだけだ。それなのに、誰よりも戦果を挙げたかのような顔で軍にのさばる、馬鹿げた存在だ。いざ頼るモノがなくなれば、地べたに這いつくばって「本当の自分はこんなものじゃない」などといい晒す、クズどもだ！！」

「ふ、ざけるな！ 僕は元・国家代表の……」

「ISがあれば、だろう！ なければそうやって地面に転がるただのクソ虫だ。どうだ、悔しいか？！」

「ぐ、うう。くっそおお……」

シャルロットは口惜しそうに言葉を吐いた。力なく項垂れた。

彼女のその様子は、男にとって自分の望む最高の反応だったのだろう。下卑た笑いを響かせると、満足そうな顔をした。

「くくくつ。悔しそうだな……なあ、何故、ISは動かないのだろうな？ 偉大な設計者さん、貴様なら当然わかっているんだろう？」

うすら笑いを浮かべながら、カツカツと足音を鳴らし近づいてくる。シャルロットのすぐ横まで来ると、屈み込み、そして彼女の顔を覗き込んだ。

シャルロットの目はその男の言葉に狼狽した。ますます男は満足そうな笑みをみせて、そして彼女に向かって教え諭すような仕草を取る。鼻先に指を突きつける。

「教えてやるよ、バカな設計者さん。貴様のISにはもともと時限式に発動するウイルスが仕掛けられていたのさ。フランスから貴様に渡される前に、製造段階に組み込まれたコンピューター・ウイルス。それは今日、この日の数時間だけしか効果は維持できないが、貴様のISの機能を完全に停止させるすぐれモノだ。普段、守りの硬いIS学園内にいる貴様には手出ししづらくとも、こうして校外に出てしまえばいくらでも手はある。これは予め学園の臨海学校を狙って計画されていた襲撃なのだ！」

「……………」

その時、シャルロットは一つ目のカードを手に入れた。

男は彼女にはめられたのだ。シャルロットは自身のISが何故起動しないのか、その理由を見事に聞き出したのだった。

シャルロットの次の攻撃は、沈黙……。

もう、どうにもならないのだ、と現実を受け入れたような表情。自身を哀れむような遠い目。今の心情を吐露したくても止まったままの思考が言葉を紡ぐことはなく、まったく開こうとしない唇。肩を落とし、うなだれて、もはや抵抗の意思はない。シャルロットは自身をそう偽装するのだ。男の希望通りに、ISがなければ何もできない無力な少女を一人、創ってやる。
男を油断させるために。この沈黙は剣だ。

先ほど聞き出した情報だけで、シャルロットはすでに男からインシアチブを奪い取っていた。

何故なら、シャルロットとモアノーを蝕むウイルスには効果に限りがあるからだ。しかもそれは感染させた彼らにしてもどれだけ維持できるかわからない不完全な物のようだ。ならばたとえ男が平静を装っていたとしても、時間経過と共にリスクを負うのは彼らの側だ。そのプレッシャーは時を追うごとに増していく。

それに『殺害も許可されている』と言った男の言葉が真実だったとしても、今のこの現状がそれを『最悪の場合のやむを得ない選択』であることを証明していた。

それを第一の選択肢にできるのであれば、彼らはなにもこんな仰々しい鉄の塊を持ち出す必要はないのだ。彼女がウイルスの力でISを起動できなくなり、絶対防御を失った時点で早々に殺害してしまえばいいはずである。

だが、それをできない理由

おそらく、フランスはシャルロットの頭脳や技術をどうしても我が物にしておきたいのだ。その能力の全貌を知っているが上の、湯

望。なんとかして彼女を自分達の手元に置いておきたいのだろう。しかしその執心がこの作戦を彼らにとつて絶対不利にさせている。シャルロットは少しでも時間を稼げばそれだけ自分が有利になるのだと理解した。

ならば焦ることはないのだ。この作戦はすでに失敗している。彼らは敵の実力を見誤っているのだ。あの人六人の実力を。

僚機の輸送を目的とした一機は予想通りエネルギーをかなり消費していたため、一夏達はまずその一機を集中的に攻撃することで撃墜に成功していた。

しかし、問題はこれからだ。

最初の一機を失うことはおそらく敵も想定内のはずだ。何故なら、先ほどの一機と残りの七機は明らかに動きが違っていたからだ。残った七機のISは非常によく訓練されていて、連携のとれた巧みな動きでの確に一夏達のエネルギーを削りにかかってくる。必然的に防戦気味の戦いを強いられることになる一夏達。

「チツ、動きが……速い！」

「慌てるな。一機ずつ片付けるまでだ」

ラウラは言った。しかし彼女にしたって余裕があるわけではない。それは当然だった。たった一機で小国規模の軍事力なら圧倒するといわれるIS。それが戦力差は倍以上あるわけだ。おまけに向こうは訓練された正規兵、こちらは専用機持ちとはいえ国家代表の候補生。圧倒的に相手方有利に違いなかった。

だが、諦める気など毛頭ない。ラウラはシュバルツェ・カツツ（小型誘導ミサイル）を牽制に使うと、AICで一機の自由を奪い、レールカノンを掃射した。

防御の出来ない状態での直撃。がっさりと削るシールドエネルギー

「。だが、攻撃の狙いはそこではない。」

「一夏！」

「うおおおー、零落白夜あー!!!」

イグニッション・ブーストで懐深くまで飛び込むと、躊躇なく一閃する。まるで断末魔のような鋭い悲鳴を上げ、海へと墜落する量産型モアノー。これで3対6。

「よしッ！」

一夏が握りこぶしを作った。

「馬鹿者、気を緩めるな！」

刹那、ラウラの声がセンサーを通して響き渡った。

そして、ロック・オンされたことを示すアラートも。

「しまっ、うわぁー！」

次の瞬間、視界に一夏を狙う四発のミサイルが飛び込んできた。

回避運動は、間に合うかッ?!

「ちっ」

しかし、ラウラによってそこにシュバルツェ・カツツの弾幕が張られる! 雨のように散らした小型ミサイル群の中を、相手の四発のミサイルは通過できずに撃破される。事なきを得た一夏は胸をなで下ろすが、それすらラウラに見つかって激しく叱責されてしまう。「お前は馬鹿か! 私達は今、自分達の倍の数の敵を相手にしているんだぞ」

「わ、わかって……」

「わかっていない!! いいか、お前が相手を攻撃すれば、必ず別の誰かがそこを狙っているんだ。攻撃の後にできるスキには必ずと言っていいほど反撃が来ると思え。常に守りを意識して戦え。わかっただか?」

「う。……ああ、わ、わかったよ……」

一夏は雪片式型を構え直すと、周囲を見回し警戒する。

頭上に二つの機影が走った。見上げると一夏達に襲いかかる二機

のラファール・モアノーが、一機はショットガン『レイン・オブ・サタデイ』を、もう一機はGAU-17/A『ミニ・ガン』を構え、二人に狙いを定めている。

「一夏、飛び込め！ ショットガンの射程にだけ気をつければいい」「了解！」

一夏は雪羅をカノンモードに切り替え牽制に使うと、二機を散開させた。そして素早くショットガンのほうのモアノーとの距離を詰める。細かい動きではショットガンの散弾を避け切ることはできないので、左右に鋭いフェイントを入れてから一気に距離を縮めた。モアノーはその動きを予想していたかのように、取り付いてくる白式目がけ、素早い銃のグリップヘッドでの打撃を見舞おうとする。

一夏の鼻っ面に向け銃底を振り下ろした。一夏は相手の予想外の流れるような攻撃を回避することができず、そのままの速度で正面から突っ込んでしまう。派手な威力こそないものの、一夏の出鼻をくじくには十分の先制攻撃が、彼の眉間に見舞われる。

が、モアノーにその一撃の手応えは残らない。

眉間の辺りを狙った打撃は確かにそこに届いたはずなのに、まるで実態がないかのように銃底は一夏の顔を突き抜けてしまったのだ。「……………ッ?!」

突如、目前の一夏の残像を突き抜けて、後ろから人影が飛び出す！ それはなぜか織斑一夏の姿をしていた。彼のシルエットを突き破り、彼の実態が迫るような錯覚。

「イグニッション・ブースト『セカンド・フラッシュ』!!」

一夏の必殺のコンビネーションが、この実戦でも見事に成功した。雪羅のクローモードがモアノーの腹部をぐさりと貫く。そして相手のシールドエネルギーを奪う。

激痛に顔を歪めるパイロット。だがそこは訓練されたプロの軍人、装備を近接ブレード『ブレット・スライサー』に切り替え、激しい痛みにも歯を食いしばりながらも一夏を反撃した。顔を突き合わせるくらいの近接戦だ。チャンスはピンチ、振りかざされる刃の全てを

かわすことはできず、一夏もダメージを食らってしまつてしまつた。たまらず一夏は相手の体に組み付いて自由を奪おうとした。しかしボクシングのクリンチよろしいこの行動は、ルールのない戦場では意味を持たないのだ。モアノーは持っていたブレードを逆手に持ち替え、必殺の一撃を素早く一夏へ振り下ろす！

「……残念。俺はお前の動きを封じる、ただの『おとり』なんだよ」

一夏の笑みが見えたかどうか。

モアノーパイロットのこめかみに直撃したシュヴァルツエア・レーゲンの徹甲弾が、シールドエネルギーの全てを奪い取り、そしてパイロットの意識も奪い取った。

これで3対5。

目をやると銃撃の主は、巧みなワイヤーブレードとシユバルツエ・カツツの複合攻撃を牽制に相手を寄せ付けず、また三枚のベルク（ガルウイング・シールド）と王の盾を展開して相手の激しい銃撃をいとも簡単に防いでいた。

思わず一夏は唸る。

『 相手を攻撃すれば、必ず別の誰かがそこを狙っているんだ。攻撃の後にできるスキには必ずと言っていいほど反撃が来ると思え、常に守りを意識して戦え 』

つまりは今、頭上で行われていることをやれ、ということなのだろうか？

片手間にしては鉄壁の防御。片手間にしては針の穴も通すピンポイント攻撃。高レベルもここまでいくと、もはや神業のように感じる。しかし銀髪の美少女は、それをさも当然の事のように表情一つ変えずにやってのけてしまう。一夏は畏敬の念をもってそんな彼女を見上げた。

ふと、気付いた。その視線の もっともっと先に、閃光が爆ぜるのが見えたのだ。

「なんだ?!」

一夏がハイパーセンサーのヴューを拡大させて閃光の見えた場所を探る。すると

「ほ、篝ッ?! ラウラ、……紅椿が!!」

慌てて一夏が叫ぶ。ラウラが気付き、視線を送る。その先

「なっ?! まずい、一夏ッ! 急げ、篝を!!」

「ああっ!!!!」

二人の緊張が一気に高まる。声を荒らげる。一夏が白式に呼びかけると、スラスター翼が最大出力で稼働するために大きく展開した。視線の先の上空を目指す。

そこには なんと4対1。壮絶な絵面が展開されている。

このままでは……幕が、危ない!!

一夏と白式がまさに飛び出そうとする間際、ラウラと遣りあっていたモアノーが急に左手に何かを粒子変換させた。そしてそこから握り拳くらいの塊が、一夏に向けて発射される。

頭上から降ってくる塊。大した速度でもなく、決して反応できないようなものではない。一夏はそれを軽く薙ぎ払って飛翔しようとした。が、

「一夏、ダメだ！ そいつに触るんじゃない!!」

ラウラの声が轟く。しかしその声は一瞬遅く、すでに一夏の右腕は振りかざされていた。

刹那、爆発。

「ガア、ぐああー!!」

一夏が叩き切ってしまったのは、グレネード弾。それが彼のほぼ真正面で爆散した。爆発の衝撃を近距離で受けた一夏はかなりのダメージを負い、吹き飛ばされる。

「一夏あー!!」

ラウラの声が悲鳴のように響く。「大丈夫かッ?! 返事をしろ!」彼女の必死の呼び掛けに答えたくても、一夏は爆発の衝撃で頭が朦朧としてしまつてうまくいかない。ようやく彼が返事をしたのは、爆炎が収まってラウラ自身が肉眼で白式の無事を確認できたのとほぼ同時くらいだった。

「くそ、やられた。大丈夫……じゃないな、これは」

機体の損傷はともかく、シールドエネルギーはかなり消耗してしまった。それはつまり、一夏にとって攻撃力の大幅ダウンを意味す

る。零落白夜は使えて、あと一、二回が限度だ。

「どうやら私達はまんまとはめられたようだな。こいつら、最初から箒を狙って……」

ラウラは苦々しい声を搾り出した。一度、モアノーと距離を取り、一夏の体勢を立て直させるために手を貸す。

「一夏。私が奴を引きつけている間に、箒の援護に行け。あいつのところに行けば、今、失ったエネルギーは絢爛舞踏でなんとかなる」

「ああ、わかった。……でも、ラウラは一人で大丈夫か？」

「お前は私を誰だと思っている？」

「……そうだな」

一夏は素直にラウラの言葉に従うことにする。

二人が耳打ちでの作戦会議をしている間に、頭上のモアノーも行動を起こしていた。手に持っていたミニ・ガンとグレネード・ランチャーを放り投げると、新しい装備を粒子変換し始めたのだ。それは手元に銃器を呼び出す際に比べるとかなり大きな粒子の量だった。あつという間に光は上半身全体をほぼ覆った。そして数瞬の後、実体化すると左右の手に一対ずつのハンドアックスと、背中に十数基の小型噴射口を持った増設のスラスタパックへと姿を変えたのだ。それはラウラにしても初めて見る、特殊な装備だった。

「な、なんだ?!」

「あれは……そうか、オートクチュール! むうう、コイツは隊長機かッ!」

ラウラは叫ぶと、次の瞬間にはもう両腕のプラズマ手刀を展開し、駆けていた。モアノーに真正面から激突し、何度か切りむすぶと、今度は鐔迫り合いで相手と睨みあった。

「一夏、さっさと行……ッ、なっ、グア……!」

先制攻撃で相手の出鼻を抑えるつもりだった。しかしラウラの目論見はあっさりと退けられてしまう。

激しい音と共に、シュヴァルツェア・レーゲンの左肩が爆炎を上げた。ガルウイング・シールドが切り落とされた。ラウラの表情が

驚きと苦痛に歪む。そして出来た一瞬のスキにモアノーの素早い攻撃が続く。ラウラは相手の二の太刀を防御するのもままならず、両腕で顔を覆うのが精一杯だ。

「ラウラーッ！」

ガキイツと音がして、振り下ろされる攻撃を受け止めるのは一夏だった。間一髪、モアノーとシユヴァルツェア・レーゲンとの間に白式が割って入ったのだ。

「大丈夫か、ラウラッ」

「……ああ、問題ない。それよりも、一夏、気を抜くな」

「わかつている！」

ラウラと言葉を交わしている間もモアノーの巧みな攻撃をさばきつつ、一夏はなんとか筈のところへ向かうスキを探し出そうとしていた。しかし、モアノーの剣撃は止むどころか激しくなるばかり。次第に一夏は押し込まれてしまう。

「ぐっ、ガアッッ！」

二本の斧の攻撃は絶え間ない。しかしそれだけが一夏を苦しめているわけではなかった。

動きが、敏捷で柔軟なのだ。

これまでどんな訓練、どんな相手と戦った時とも違う動き。速く、鋭く、そしてしなやか。巨大な斧を振り回しているとは思えないくらいに、その動きはなめらかに一夏を襲うのだ。もしもISの動きを『直線』に例えるとしたら、このモアノーの動きはまるで『曲線』のようだった。それが一夏を苦しめる。軌道が、全く読めない。

「くそっ、受け……切れない!!」

「一夏あーっ！」

一夏一人では手に負えないと見るや、素早くラウラは加勢に加わった。プラズマ手刀がモアノーのアクセスを弾くと、ほんの一瞬出来たスキを突き超至近距離のルールカノンを見舞おうと、照準を合わすより先にトリガーを引く!

「なっ?! グアアアッ」

「うわあっ!!」

しかしラウラが放つその強引な攻撃すら、モアノーは躲すのだ。そのオートチュールの十数基の小型スラスタが絶妙なコントロールで推進力を調整し、流れるような動きを実現する。制動ではなく流動。速度を落とすことなく転回することで俊敏に一夏達二人の背後に回り込むと、振りかざす二対の斧が無防備な背中に突き立てられた。

激しく削られるシールドエネルギーと、見せつけられる実力差……。

ハイパーセンサーが伝えるデータが、白式のエネルギーがイエロゾーンに入ったことを示す。これではもう、零落白夜は使えない。一夏は歯を食いしばる。こうなっては彼に打つ手はなかった。一体、どうすれば

その時だ。

彼の視界を、真紅のシルエットが遮った。

そう、見えたのだ。

その背中から獅子の立髪のように開き、はぜる、暁光。

膨大な量の粒子の輝きが一夏の眼前一杯に広がる。目の眩むような鋭い光は、思わず顔を背けてしまうほどだった。

そして赤の背中は咆哮のような音を残すと、電光とみまう神速で再び上空へと飛翔していつてしまった。

その場に絢爛舞踏の眩い輝きを残して。一夏とラウラに、もう一度戦う力をもたらしして。

頭上には再び4対1。壮絶な絵面が展開されている。しかし

もしもISSの動きを『直線』に例えらしたら、その動きはまるで『閃光』だ。見上げると、紅の疾風が大空を鋭く切り裂き、たった4機しかない敵を圧倒しているのだった。

牽制がわりに空裂を薙ぎ、その攻撃を散り散りに回避する4機のモアノーそれぞれに対し、今度は雨月のレーザーを見舞う。避けきれずに防御する1機を見付けると、箒は急接近して鋭い膝蹴りを叩き込んだ。

しかしモアノーはよく訓練されていた。チームワークは抜群だった。別の1機が直ぐ様、援護のアサルトライフルを紅椿に向けて突き付けてくる！……が、もう既にそこには穿千とレーザーの集中攻撃が打ち込まれていたのだった。まずはその攻撃で最初の1機が戦闘不能になり、海面へ落下していった。

箒は動きを止めない。紅椿はすぐにまた上昇すると、今度は機体の最大加速でモアノー達を攪乱し始めた。時折斬撃を見舞い、また時折急接近し、相手の攻撃を巧みにかわしながら絶妙の距離を取りつつ、そしてじわじわとモアノー達のシールドエネルギーを削り取っていく紅椿。モアノーの側はその紅椿の速度に完全に振り回されるかたちとなった。接近しようとする回避され迎撃を受ける。距離をとってしまつと今度はまったく捉えられなくなる。そうでもなくても消耗戦では圧倒的に分が悪いのだ。3機はとうとう作戦を変更した。人型では紅椿には追いつけないとみるや飛行形態へと移行し、フォーメーションで紅椿を追い詰めるつもりだった。

そしてそれは、まんまと箒の思う壺なのだ。形態移行の瞬間を、彼女は見逃さない。

ほんの一瞬で急接近すると、1機目を斬撃の餌食にした。そして一番速く形態移行が終わるような別の1機には、左右の穿千を叩き込んで出足を封じた。虫の息になった眼前のモアノーに素早くとどめの回し蹴りを食らわし、飛びついた次の1機には雨月と空裂で背中から串刺した。絶対防御が働くか働かないかのダメージに吐血する操縦者に、箒は小さく耳打ちする。その言葉でまるで生気を失

つたように表情を無くすモアノーの操縦者を、紅椿の無情な刃が最後のひと太刀にかける。煙を上げて落下していくモアノーが激しく海面に激突した。これで、残るはあと1機。それも手負いの相手だ。勝負は決した。最早目の前のモアノーは箒の敵ではなかった。

紅椿達よりやや低空で戦闘状態だった一夏は、一連の戦闘を見上げるようにしていた。彼の目にはすべてが一瞬の出来事のようにだった。箒は機体の性能を最大限に活かし、モアノーを圧倒していた。同じように紅椿の戦闘を目撃していたラウラは、はたと気付き、そして突然叫んだ。

「……そうか！」

彼女はハイパーセンサー越しの一夏に指示する。

「一夏、イグニッションブーストだ！ スピードで奴を振り回せつー！」

言われて一夏は返事をするよりも先に、直ぐ様行動を起こした。ノーモーションで繰り出すイグニッションブーストでモアノーとの距離を詰める。そしてすれ違うようにして何度も、何度も、雪片式型で相手に切りつける。ラウラの指示通り足を止めて切り結ぶようなことはしなかった。ヒット&ウェイを繰り返し、出来るだけ接触を少なく戦う。

その間、シュヴァルツェア・レーゲンは援護射撃に徹した。一夏が深く入りすぎると、レールカノンで牽制し、時折はAICで相手の自由を奪おうと攻めた。実際のところモアノーを捉えるまでにはいたらなかったが、あくまで目的は陽動なのだ。それに一夏にとってラウラのその行動は絶妙の援護でもあった。

形勢はあっという間に逆転した。モアノー隊長機の攻撃は、一夏達にまったく届かなくなった。逆にスピードで翻弄され、モアノーはエネルギーをじりじりと失っていった。上空の4機と変わらない状況に、こちらのモアノーも同じ対応を取らざる負えなくなる。つまりは、隊長機はハンドアクスもオートチュールも粒子の粒に変

え、機体を飛行形態に移行するしかなかったのだ。

そしてその瞬間を、ラウラ・ボーデヴィツヒは待ち構えていた！
「うおおおっー！！」

敵の正面からなのも構わず、シュヴァルツェア・レーゲンがスラストアーを全開で真っ直ぐに突撃する。それに対し、モアノーの反応は一瞬遅れた。形態移行の最中を狙われたことで、いとも簡単にラウラの接近を許してしまった。慌てて粒子変換し呼び出したアサルトライフルで、モアノーは照準もろくに合わせられないままに迎撃する。が、対するラウラは左手の王の盾を無造作に投げつけた。弾丸のほとんどが、その投げ捨てられた盾によって弾き返されてしまう。シュヴァルツェア・レーゲンはそのスキに弾道からわずかに機体を逸らしつつ、更にモアノーに向かって突っ込んだ。そして、右手を前に突き出す。

「止まれええ！！」

シュヴァルツェア・レーゲンの右手がAICを発動する。そして遂に、モアノーの自由を奪うことに成功する。ラウラが叫ぶ。

「一夏ツ、今だ！ 零落白夜を！！」

「ああっ、任せろ！」

ラウラの声が届くより先に、一夏の体はもう反応していた。筈が先程の戦いの中でみせたモアノーの弱点に、遅ればせながら彼も気付いたからだ。ラファール・モアノーは乗り手を選ばない汎用機だ。しかし、そのスペックはあくまで『彼女』を基準に造られているに違いない。これはもしかしたら設計者も気付いていないのかもしれない、とんでもない致命的な欠陥だった。

そう　ラファール・モアノーの形態移行は、ラピッドスイッチがあつてこそ有効なのだ。そうでなければ換装に時間を使う分、戦闘中の形態移行は非常にリスクを伴う。掛かる時間がたとえほんの数秒だったとしても、戦闘中に停止していればそれは空中に浮かぶ的ではない。筈の戦い方を見て、そのことに一夏とラウラは気

付いたのだった。

一夏の振り下ろす刃が、身動きの取れなくなったモアノーを遂にとらえる。勝負は決した。はず、だった。

「……一夏、どうした。何を躊躇している?！」

振りおろされた雪片式型。その切っ先を包んでいた零落白夜の光が、何故か次第に消失していく。そして刃はモアノーに届く直前で止まってしまった。一夏の表情が困惑しているのに、ラウラが気付く。

「一夏ッ!」

「違うんだ……この人の顔、戦っている人間の顔じゃない……」

「こんな時に、何をっ?!」

「まるで覚悟したみたいな顔で……戦意が、ないのか?」

「チッ!」

ラウラは舌打ちすると、左手のプラズマ手刀を展開した。躊躇う一夏の代わりに彼女がモアノーに飛びかかる。だが、その行く手を一夏が遮る

「ラウラ、ダメだ!! 何か違う! 間違ってる!」

「お前のほうこそ、間違ってるぞ! こいつを叩かなければ、シャルロットがッ!」

ラウラは立ちふさがる一夏を押しつけてモアノーを攻撃しようとするが、一夏がそれをさせない。ラウラの振り払おうとする手を白式は屈みこんで掻い潜り、シュヴァルツェア・レーゲンの懐に入り込むと、組み付いた。

「馬鹿者ッ! いい加減に……」

その時だ。モアノーのパイロットの目が、一夏に向けられた。その唇が小さく動いた。

「やりなさい。もともとそのつもりだから……」

「なっ?!」

呟く言葉に、一夏は面食らった。そして彼女の続く言葉に彼は激

しく動揺する。

「こんな戦い、本当は間違ってるのよ。……たとえあの子がフランスにとつてはジャンヌ・ダルクなのだとしても、私達すべての女性にとつたらあの子はグレース・ケリーなの。愛のために、地位も名声も祖国でさえ捨てて……。あのオレンジの機体は、今じゃフランスじゅうのIS乗り達にとつて憧れ。勇気と誇りの象徴よ。それを汚すようなこんな作戦、本当は血を吐くほど嫌よ。もう……こんな命令、耐えられないの」

「……………」

一夏の目が彼女を捉えたままじつと見据えた。真意を、探ろうとした。けれど、その表情には感情を欠片も見つけることはできない。「……お前は、本当にそれでいいのか？」

一夏は、低い声でモアノーの操縦者に問いただす。けれど、彼女の表情はさつきと少しも変わらない。

「ええ……。でないと、フランスは引かないわ。だから、お願い。やって頂戴」

唇を強く噛んだ。眉間に皺を寄せた。一夏の胸に苦いものが落ちた。

シャルロットを助けない、その思いで必死で戦っていた。なのにどうだ。刃をぶつけ合ったこの相手も、実は決して本心で敵対していたわけではなかったのだ。それどころか命令や作戦といったそんな不条理な理由で、この女性は自身の意思に反して行動せざる負えなかった。彼女もシャルロットを救いたい一人だったわけだ。そしてそのためには、自身を……

「くっ！ ああ………わかったよ！！」

一夏は表情を固くする。ラウラを留める腕を解き、再び構えた。雪片式型がもう一度零落白夜の光を放ち始める。

「………すまない」

「あなたが謝ることじゃないわ。………それより、彼女をよろしく。お願いよ」

「ああ……」

そして一夏の手が決意をもって振りおろされた。

この手で必ずシャルロットを救い出す。あらためて一夏は、そう決意する。これはただ自由を取り戻すための戦いなのだ。敵が誰でも、そこにどんな思いや願いがあつたとしても、自分はシャルロットを救うためだけに戦うのだ。そう、……割り切らなければ、彼はもう前に進めない気がした

隊長機を失つたことで、残っていた1機も投降した。この戦いは終わったのだ。

そしてその事實は、深海で作戦行動中の友軍にも伝えられていった。

遂に、戦局が動き出した。

「タヒチより入電」

クルーの一人が男に向かつて短く言った。男はゆっくりとそちらに顔を向け、顎で合図を送る。クルーがほんの一瞬だけ躊躇し、しかし抑揚なく言い切る。

「モアノー小隊、壊滅。撤退しました」
「なっ?!」

男は表情を強ばらせた。後ろ手に組んでいた手を解き、ゆっくりと拳を作つて握りしめる。眉間に皺を寄せる。

「まったく……これだからIS乗りはっ!」

吐き捨てる、歯を食いしばった。その歯ぎしりの音が周囲にも伝わるくらいの苦々しい顔を見せた。

「訓練エースばかりで、実戦では作戦一つまともにこなせない! だから女だけの小隊など役に立たんとあれほど言ったのだ。くそっ!」

腹立たしそうに狭い操舵室内を横切る。カツカツと荒々しく靴底を踏み鳴らすのは、男が生粋のサブリーナー出ないことを表していた。海底に音を響かせるような行為は、自分達の居場所を敵に晒すようなものだからだ。操舵室のクルーの中にもそれを良く思わない者がいる。何人かのクルーは、見えないところで表情を歪めた。それを シャルロットは敏感に感じ取っていた。

「増援は?」

荒々しく言い放つ男の声に、通信担当らしきクルーが首を振った。「ありません。タヒチより指令、『貴艦は単独で進行、寄港されたし』です」

男はそれには応えない。指先で顎を撫で、じつと一点を見つめて思索した。その男の少し後ろから、一步近づくと影があった。

「……出ますか、大佐」

大佐と呼ばれた男のすぐ後ろに立った、スラリと背の高い別の男が呟くように言った。小さな声のはずが一本の線のように凜と、細く長く辺りに響く。その声は床に寝そべった体勢のシャルロットにまでしつかりと聞こえた。それで彼女はなんとなく理解した。この男の方こそ、この艦の艦長ではないかと。軍人にしてははやや細身の身体。痩けて頬骨の形がくつきりと出た顔立ち。しかし、独特の重厚な雰囲気がある。そして目は何処か遠くを見据えたような、一種、不思議な輝きをしていた。

シャルロットはその眼を覗き見た瞬間、ぞくぞくと背筋に何かが走るのを感じた。

彼女は慌てて視線を逸らせた。眼が合ったわけではない。ただ、その男の栗色の瞳がちらりと見えただけだ。が、全身が何かを察知したかのように総毛立っていた。

『この男は危険だ』、そう彼女の直感が語っていた。握る手のひらに、じつとりと汗が滲んでいる……。

そんなシャルロットの様子には当然気づくことなく、大佐は鼻を鳴らすような仕草をすると艦長と思しき男に威圧的な声色で返すのだった。

「当たり前だ。相手はIS、それに専用機持ちとはいえ、たかが17〜8の小娘共だ。青臭い盛りの女などに、イチイチ私の崇高な計画の邪魔をされてたまるか！ 艦を発進させろ。タヒチへ向かう」
「……了解です」

艦長は短く返事をする、操舵室全体にぐるりと視線を投げた。
「総員、発進準備。進路をタヒチにとる。海上のISに注意を怠るな」

「了解」

クルー達は、低く短く、深い返事で応えた。全員の真剣な眼差しが、それぞれの担当する計器に戻る。しばらくすると、ググツと船体が動くのを感じた。

事態はついに変化した。それも彼らのプランとは異なる方向に。

シャルロットは胸の奥に温度の高い塊のような物ができるのを感じていた。実際、艦の外のことを彼女は知る由もない。けれど、この事態の変化は間違いなく『彼ら』の行動によるものだ。それは確信があった。次第に溶け出す熱い塊。それがじんわりと喉元まで迫ってくると、熱かった筈のそれは人肌よりもほんのちよつとだけ温かなエキスになって、シャルロットの口内にいつぱいに広がった。味なんてないはずなのに甘く、香りなんてないはずなのにまた甘く、シャルロットの感覚を優しく包み込む。これって『希望』なのかな、とシャルロットは考える。そのイメージで出来た味や香りはそれぞれまったく違う印象なのに、全部が交ざって思考と感覚の中に広がっていくと、たった一つをモノを連想させる。

短く切った黒髪。ちよつと日に焼けた肌。優しい瞳。なぜか一人の人物を思い起こさせる。

どうしてそんなふうにしたのかは彼女自身わからなかった。だが、決意を促すきっかけにはなった。

「うん。必ず帰るんだ。だから……」

シャルロットはひとりごちに小さく呟いた。そして覚悟を決める。不安要素はたくさんあった。特に、この艦長に関しては底がしれない恐怖すら感じた。けれどももしも機会を逸すれば、二度と再会することは出来ないかもしれない。その恐怖は、ほかの何よりも耐えられないから。そして、

ついにシャルロットは動く

「…………ガッ、あああつ！！ あ、熱いッ、か、体が焼けるようにっ！ あ、熱い、助け…………て」

突然、シャルロットは床をのたうち回った。激しく体を捻じ曲げ、

転がり、時折壁に背中を打ち付けた。

顔を真っ赤にして、苦痛を訴える。歯を食いしばっても耐えられずに、嗚咽をもらし、涙もこぼした。荒く息をつき呼吸すると、うまく空気を吸い込めずにむせ返す。そしてまた体の中から走る痛みと焼けるような熱の波に襲われ、もんどりをうつ。

「ああつ、ああつ、ああつーー!!」

激しく悲鳴を上げた。口元から涎を垂らし、頭を振り回した。いつもの彼女では有り得ない、取り乱した姿。それをしばらく冷淡な視線で見っていた大佐が、しかし突然気付いたかのように色を失った。

「……まさか、ウイルスが……切れるのか?!」

「なっ?!」

艦長の男が絶句した。刹那、シュツと息を呑むと素早く動作する気配。だれかが何かを取り出した。そして、ガシャツと金属のスライドする機械的な音が室内に鳴り響いた。シャルロットは自分にその『何か』が向けられたのを感じ、ほんの一瞬身を固くした。

しかし艦長の叫び声がすぐに大佐を制しに入る。

「いけません、大佐！ 撃っては……殺してはなりませんっ!!」

「……貴様。何故、止める」

「ご自身の計画を捨てるおつもりですか？」

艦長は諭すように少し低い声で言った。ギリツと奥歯を噛み締めるような音が聞こえた。

「……ッ。しかし、ここでこの娘がISを起動できるようにすれば、計画どころか全てが終わるぞ」

チャツと金属が鳴るのが聞こえた。どうやらシャルロットに向けられた銃口は下ろされたようだ。彼女は小さく「ううっ……」と嗚咽をもらしてみせた。背中に、二人の男の鋭い視線を感じた。

一呼吸ぶんの沈黙があつて、その後、艦長が切り出した。

「『奴等』から渡されたウイルスについては、我々もその全貌を理解している訳ではないのです。このような発作を起こしたらすぐに効果が切れるのか、それだつてわかっていない。ならば今は、計画

を維持するべきです」

「う、うむ……」

大佐の低い声がした。銃を仕舞う革と金属の擦れる音がする。

「我々はこの娘をタヒチに……本国に必ず送り届けなければなりません。他国の手にこの『脅威』を渡さぬようにするのが、この作戦の目的なのはお忘れではないはずですが、あくまで生かしておく必要はあります。今やこの娘は世界じゅうで引く手数多の『時の人』だ。その存在を完全に消しさせることは非常に難しいのです。万が一、フランスが彼女を手にかけたとわかれば、我々はあつという間に世界の敵にされてしまいます」

「わかつている……」

「大佐は、この作戦の成功で准将に昇進していただかなければならない人物です。そしてIS主体、女性が幅をきかせる軍を、正しく再編成して頂く必要があります。そのあなたが、こんなところで手を汚すのは、まずい。自覚を……もっとしっかりと持って下さい」

艦長の声が語調を強くした。それに対し、大佐が舌を打つ音がすかに聞こえてきた。

「ふんっ！ もういい、わかつている！！」

大佐がまた荒々しく音を立てて移動していった。どうやら部屋を出ていこうとしているようだ。その背中に艦長が言葉を投げる。

「……速度を、上げます」

「勝手にしろ」

最後の一言を残し、大佐は操舵室を出ていった。シャルロットはその様子を、壁に頭を押し付け、痛みに憔悴したようにぐったりとした姿のまま伺っていた。

艦長がクルーに指示を送る。ゆっくりと船体が加速していく。床に倒れた体勢のまま、シャルロットはじっと目を閉じて祈った。

自分の命を掛けたこのシグナルが、彼らの元に届くように、と。

「鈴さん、簪さん……………見つめましたわ」
その祈りは、蒼の少女に届く

「大きさから言って150〜160m。進路は……太平洋南東。急に加速し始めましたわね。おそらく、ラウラさん達との戦局が思わしくなかったんでしょう。自力で目的地にたどり着かなくてはならなくなっただんですわ」

ブルー・ティアーズ各機からリアルタイムで送られてくる膨大なデータをハイパーセンサーで解析しながら、セシリアは小さく頷いた。

「間違いありませんわ。……鈴さん、簪さん、聞こえてました？」

セシリアは回線越しに二人に呼びかける。すると、

「……ッ！ やつと継ったわ。ちよつと、セシリア！ アンタ、回線切ってたでしょう?! 何回、呼びかけても返事がないじゃないよっ!!」

開いた回線からは応答よりも先に、苦情が飛んできた。そして鈴が堰を切ったように捲し立てる。

「……? ああ、そうでしたわ! わたくし、集中するために鈴さんの回線を切っていたんですわ。忘れてました」

「アンタねえ! なんかあったら、一体どうするつもりだったのよ?!」

「そうですけど……わたくし、あなたの大声を聞きながら繊細な作業をできるとは思えませんわ。これはいわば作戦成功のための必要悪ですよ」

「い、……いい度胸ね。アンタ、背中に気を付けなさいよ。いつか必ず敵ごとぶった斬ってやるから!」

鈴はセンサーのビュー越しに、額に幾つも血管を浮かべる。そんな二人のやり取りを戒めるかのように、簪の回線が割って入ってきた。

「二人とも……いい加減にして。……セシリア、一夏達が増援を退

却させた……」

「みたいですね。おかげでわたくし達のお目当ても動き出しましたわ。ターゲットの位置、送りますわね」

そう言うと、セシリアは鈴と簪の二人にブルー・ティアーズからのデータを転送する。それを見た二人から歓声が上がった。

「セシリア、アンタ、やったじゃない！ お手柄よ！！」

「……凄い。確かに理論上は可能だったけれど、……はつきり言って操縦者の感性頼みだった……」

自身の責任を全うしたことの安堵もあってか、セシリアは持ち前の自信家っぷりが戻ってきた。「ふふん」と軽く鼻を鳴らすとお決まりの腰に手のポーズも復活した。

「わたくしとブルー・ティアーズに不可能なんてありませんわ。当然の結果ですよ！」

しかしさっきの仕返しもあってか、そんなセシリアの鼻っ柱を鈴が折りにかかる。

「……けど、このパターンでいつもアンタ、失敗してるわよね。もしかして、これもでっかいクジラとかだったりするんじゃないの？」

「し、失礼ですわね?! 大体、100m以上もあるクジラなんて、聞いたこともありませんわ。ぜえーったい、間違いありませんわ!」

「ほんと? アンタだったら、世界最大のクジラを発見する確率の方が高い気がするわ」

「ちょ、ちょっと鈴さんツ、ふざけないで下さい! そこまで言うのなら、わたくし、賭けてもいいですね。お気に入りのロイヤル・コペンハーゲンの……」

「二人とも!」

再び再開した二人の小競り合いを簪の大声が制した。普段、そんなふうに声を張り上げることのない彼女だから、セシリアも鈴もちよっとびっくりして黙り込んでしまう。

「……いい、いい加減にして。……鈴、こっちはあと数分でターゲット

トと接触……」

思わずとつた自分の行動に、簪はちょっと気恥ずかしそうに頬を赤くしている。そんな彼女の表情に、鈴もセシリアもちよつと反省するのだった。簪だつて一生懸命なのだ。それに、今はふざけている場合ではない。

「簪、ごめん」

「わたくしも謝罪いたしますわ。すいませんでした」

「……ううん、いい」

三人は気持ちを切り替え、ターゲットに向かって移動した。それぞれの役割を果たすためのポジションをとり、素早く幾つかの約束事を決め、作戦を再確認し合う。と、言ってもブルー・ティアーズは潜水艦を発見するため絶えずBTビームを海中に放ち続けていた関係もあって、そのエネルギーの大半を消費していた。セシリアの役目はラウラ達との通信・連絡が主だ。

「……ラウラさん、聞こえますか？ ターゲットを発見しましたわ。……ええ、これからそちらに座標を送りますわ……」

彼女はプライベート・チャンネルを通し、離れた場所にいるラウラ達に連絡を取り始めた。

そして鈴と簪の二人もそれぞれ配置に着こうとしていた。海中の簪は、相手にさとられないようにスラスタを使わず跳躍と歩行で移動。緩やかな下りの海の床を跳ねるように進み、前方の急に深くなったその場所がセシリアの示す場所だった。そして彼女はついに目標をその目で確認する。

「……いた。間違いない……」

海中を低速で進む潜水艦。ISのセンサーが画像処理をしているからこそ見えるが、暗い海を進む巨大な黒い影、ただ闇雲に潜っただけでは確実に発見はできなかったらう。本来であれば光のあまり届かないような場所だ。ISの優れた機能を有しても、海上からの発見もほぼ不可能に違いない。

「絶対に……逃がさない。鈴っ！」

簪は上空に待機するパートナーに合図を送る。

「ええ、いつでもO・K・よ！」

それに気合の入った声で答える鈴が、甲龍の両手に双天牙月を構えた。そして目では確認できないものの、確かにそこにいる目標に意識を集中する。

「……鈴。軍事機密だからデータが正確とは言えないけれど、……おそらくは原子力潜水艦。直接攻撃は……ダメ」

「わかってるわよ、そんな事っ！」

そう言った口元が上がる。彼女の集中が高くなった時の癖だ。鈴はいつの間にか不敵な笑みを浮かべて海面を鋭く見据えていた。

「……じゃあ、作戦……開始！ 行って、『新・山嵐』……」

彼女の呼びかけを受け、打鉄式式の背中から4つの大型コンテナがパージされた。それぞれがスラスターを開き、海中を高速で前進する。目指すはあの潜水艦だ。

半年前、打鉄式式が第二形態に移行した際に変化した山嵐は、12門×4機の独立稼働型誘導ミサイルを搭載した『コンテナ型ミサイルビット』に進化していた。しかし、肝心のマルチロクオン・システムは未完成、おまけにコンテナ・ビット自体の制御にも意識を取られる羽目になり、事実上、簪はこの武装を100%の可動率で使用したことはなかった。しかし先日ようやく完成したマルチロクオン・システムを搭載したことで、とうとう簪は自在にこの装備を使いこなすことができるようになっていたのだ。

「いい……攻撃するんじゃない、水圧で押し上げるの……みんな、お願い」

簪が目を閉じ、集中する。48の意志が動き出す。

「……海底の隆起を計算してここで爆発、破片を船体に当てないように別の角度からもう一発、爆破……」

簪は集中し、イメージをより鮮明にしていく。まるで唱えるように呟き、指示ではなく問いかけるように一つの『意志』に話しかけていく。その間に4機のコンテナ・ビットが所定の配置を取っ

た。簪は一息吸い込むと、目を見開いた！

「……全弾、発射……コンテナ・ビットはシールド展開……！」

4つのコンテナからそれぞれ12のミサイルが、一つ一つ意思を持っていくかのように飛び出して行く。そしてコンテナ・ビットの方は再び加速すると、今度は船体に取り付きエネルギーシールドを展開した。ミサイル爆破の衝撃を直接船体に与えないためだった。

「来る……！」

簪の目が潜水艦の船首部分に向いた。そこから大きな音を立てて6発の魚雷が発射される。目標はどうやらコンテナ・ビットのようだった。

「……守って、新・山嵐……」

簪の言葉に何発かのミサイルが急激に進路を変え、魚雷を迎撃に向かった。そしてあつという間に潜水艦からの攻撃を全弾撃ち落とすしていく。それは当然だった。目的の場所にただ向かって行くだけの意思のない物体と、各個が何をすべきか考えて行動する生きた物体。性能の差は歴然だ。

「……さあ、みんな。……泡のベッドで押し上げるの……できるから、私達なら……」

簪が両手を広げてみせた。すでに各ミサイルはマルチロックオンシステムによつて独自に稼働している。それでも彼女は、まるで思いを伝えるかのようにすべての『意志』達に呼びかける。

「……………クリック」

次の瞬間、海底を幾つもの衝撃が走った。そして爆発、爆発、爆発。

それはまるでビル解体のように計算された破裂の連続で、海中には突如巨大な高密度の泡の塊が発生する。そして、その下でまた新たな爆発が起こる。

圧倒的な量の圧力の塊が浮上する力に持ち上げられ、海底から黒い鉄の塊が押し上げられていく。そして尚も追いかけるような爆発がその下でいくつか起こり、グングンと物体は海面に向かって上昇

して行く。

「鈴ッ……!!」

「まっかせなさいってえ……言ってるでしょーがッ!!」

上空から猛スピードで落下してくる甲龍が、両手に構えた双天牙月を海面に向けて振り下ろす。

「ぶっつっ たぎれえー！ 双天牙月・炎牙あ!!」

掛け声と共に真っ赤に刀身が燃え上がり、それが振り下ろした海面を蒸発させながら切り裂いた。鈴の眼下の海面が、大きく真っ二つに割れる。その割れ目から迫り出すように潜水艦の船体が飛び出してきた。強烈な圧力に押し出され、物体は一端、数m空中に浮き上がってしまう。そこへ、

「今ですわ。行きなさい、ブルー・ティアーズ！」

セシリアの号令でブルー・ティアーズが潜水艦の艦底に滑り込む。その重量を支えることなどできないが、船首を上げてしまえば注水は叶わない。

「やったわ！ どうよ、あたしにかかればこんな作戦くらい!!」

「ええ、わたくしとブルー・ティアーズがあれば、どんな作戦だって成功ですわ！」

簪がゆっくりと海上に打鉄式を浮上させた時、犬猿の仲の二人はまたも懲りずに遣りあっていた。

「にににに、」

「ふぬぬぬ、」

「……もう、……知らない……」

「なに、見付かったか!!」

ラウラの表情が明るくなった。声が熱を帯びた。

作戦を立案した簪を信頼はしていたが、『目標』が自分達の予想したルートとはまったく違う進路で、すでに索敵海域を離脱してしまっている可能性も否定はしきれなかった。親友を失うかもしれない不安は常に胸のどこかにずっと引つ掛かったまま、ラウラの精神を時間と共に少しずつ蝕み、焦りを生んでいた。だがリーダーを任された以上、自分の弱気は隊の士気にも関わる。不安な顔など見せられるはずはない。

そこへ入ったセシリアの報告。

ほんの一瞬だが、彼女は安堵した。しかしさすがは現役の下士官クラス、すぐに普段の冷静なラウラ・ボーデヴィツヒに戻り、気を引き締める。

「すまない、セシリア。戻るにはだいぶ時間が掛かる。お前達だけで制圧できそうか？」

指示を送りながら、ラウラはセシリアから届いた座標を一夏と篤の二人にも素早く転送した。

『目標』の現在位置は日本からそう離れた位置ではない。そして自分達は南太平洋の洋上……。とても数分でたどり着ける距離ではなかった。

「二人共、座標は確認したか？ 行きと同じ方法で戻るぞ。シユヴアルツエア・レーゲンの最高速度に合わせる。いいなっ？」

少しでも時間が惜しい。ラウラは機体を日本の方角に向け、発進の準備を整えながら二人の顔を見た。

一夏、篤が共に頷いたのを確認すると、

「行くぞ!!!」

シユヴァルツェア・レーゲンがスラストを全開で発進する。それを白式と紅椿が追いかける。ぐんぐんと速度を上げる三機は、時折の絢爛舞踏によってエネルギーの補充を行いながら、全速力でセシリア達の元へと急ぐのだった。

しかし、その時

「……ラウラ、問題が発生……」

オープン・チャネルから簪の声が聞こえた。その声は普段の簪からはあまり聞こえてこない、感情を露わにした声だった。

くだらないもめ事をする二人を律するつもりで、簪は彼女達のところに向かおうとしていた。しかし、突如ハイパーセンサーのアラートが悲鳴を上げて、警告を発する。

「えっ?! ……ロック、された? ……」

慌てて目を走らせると、艦上部の発射口が開き、矢継ぎ早にミサイルが打ち出されたのだ。

「……対空ミサイル……IS相手に、効果があると? ……新・山嵐!」

簪は直ぐ様ミサイルビットの1機を射出して迎撃に向かわせた。ほっておいても鈴やセシリアには問題ないはずだが、そうはいつてもセシリアはかなりエネルギーを消耗している。無駄な消耗は避けさせたい。

「アンタ達、バツカじゃないの? こんなもの、全部切り落としてやるわ!」

「通常兵器ですって? わたくしのような高貴な人間が、そのような下々の遊具に戯れることなどありませんわ。さあ、鈴さん。わたたくしの代わりにどうぞ思う存分おやりになって下さいまし」

うだった。しかし、あまりに予想外の出来事にセシリアが自分の目を疑っていると、今度は眼前で強烈な閃光が炸裂した。閃光は先程のミサイル同士がぶつかりあった場所から発生し、セシリアがその光の粒子に触れた途端に、ブルー・ティアーズの装甲に衝撃が走ったのだ。

セシリアは激しい痛みと苦悶の表情を浮かべた。

「なっ、なんですか、この攻撃は?! 体が、いうことをききませんわ!」

体を走る電気に身動き取れずいる間も、潜水艦からのミサイル攻撃は続く。しかし、それらは新・山嵐のミサイルが即座に撃ち落とす難を得た。セシリアを襲う痛みも次第に和らいでいく。ようやく体の自由を取り戻し、彼女は肩で大きく息をつきながら、なんとか意識をはつきりさせようと首を何度か振った。それで気が付いた。「はあ、はあ……くっ! 一体これはどういうことですか……?」

セシリアは自分の姿を見て、驚いた。ブルー・ティアーズの装甲はバックパックと脚部の装甲を残し、ほとんどが消失していたのだ。それに24機あるはずのビットも8機しか残っていない。

「セ……セシリア……」

力ない声が聞こえ、彼女は顔を上げた。すると空中に浮かんだ影が、ゆつくりとこちらに振り返るのを見えた。それは確かに鈴の甲龍のはずだ。だが、その姿は見る影もない。

「鈴さん、それ……どうしたんですか……?」

「あ、あたしだって、全然意味わかんないわよ……。だけど……」

「ええ、……これはおそらく『対IS兵器』ですわね。しかも、こんな攻撃が出来る兵器なんて、データのどこを探しても見つかりませんわ」

セシリアの見詰める先 全身の左半分の装甲とバックパックの大半、スカート部分のスラスタも多くを失ったまさに満身創痍の甲龍 が、片肺飛行でなんとか姿勢を制御している。鈴本人は否定するかもしれないが、外から見れば一目瞭然だった。もう甲龍は

戦えない。飛行するのもやっとの状態だった。

「やられましたわね。こんな隠し球を持っているなんて……迂闊でしたわ」

「ちょよ、ちょつと簪は?! ねえ、簪。アンタ無事なの? ねえ、聞こえないの?」

鈴が気付いてセンサーに向かって問いかけるも、簪の反応はない。第一、自身のセンサーがまともに機能しているのかもわからない状況だった。これではコンタクトの取りようもない。

「参りましたわね……これは状況的にかなり不利に……」
そう、セシリアが呟いた時だ。

「IS学園の小娘共つ、遊びの時間は終わりだ!!」
低くて野太い男の声が、彼女達の耳に飛び込んできた。

「簪、お前は無事なのか?」

「……私はその粒子の光から遠いところにいたから……ミサイルはほとんど山嵐が落としてくれたし……」

簪はそう答えた。

「それで、現状はどうなっている!」

ラウラの問いに、簪は自分をまず落ち着けるかのようにゆっくり一呼吸してから、答える。

「鈴とセシリアは武装解除させられてる。……それに元々飛行するのめちゃつとの機体損傷率……こちらに打つ手はない……」

「じゃ、シャルは! 簪、シャルはどうなってるんだ?!」

たまらず一夏が二人の会話に割り込んだ。

「……シャルロットは、人質。……銃を突きつけられてる。それに

あの子……なんらかの方法でISを展開できないようにされているみたい……多分、今のシャルロットに絶対防御は……ないと思う……」

一夏は低く息を呑んだ。

もし絶対防御がなければ、たとえ訓練を受けた操縦者として『只の人』でしかない。突き付けられた銃口から出る弾丸を避けることなどできないし、ましてやその弾から身を守るすべなどない。

このままでは、シャルロットの命が危ない……

「く、くっそおおーっ！！ どうしたらいいって言っただっ。

ここからじゃもう、間に合わないのか?!」

一夏の悲痛な叫びが響く。

「ラウラ、なんとかならないのか。何か方法はないのかッ?!」

「くう、……今はともかく一秒でも早く辿りつくほかはない。一夏、箒と二人で行け。シュヴァルツェア・レーゲンの速度に合わせていては、時間を無駄にしてしまう」

ラウラは先行していた自分の機体の高度を下げ、二人に道を譲った。一夏は箒に向かって叫んだ。

「箒、頼む！ シャルが危ないんだ、協力してくれ」

一夏の言葉に、箒は答える代わりに紅椿の速度を上げた。今はともかく時間が惜しい。一夏は彼女の行動を承諾と受け止め、全スラストの推力を最大に加速する。

「行っけええー、白式!!」

エネルギー効率を全く無視した、イグニッションブースト並みの最大加速で白式が飛ぶ。そしてその横にびったりと紅椿が並んでいた。

一夏は唇を噛んで感情をなんとか抑えようとした。けれど、センサー上のエネルギーゲージがみるみると減っていくのを見ると、それがなんだかシャルロットの命の残りを表しているように思えてしま

う。その、一度落ちてしまった負の概念から抜け出せなくなると、焦りと苛立ちが一夏の胸を搔き乱した。

「うおおおー！ 急げ、白式。急いでくれッ！！」

一夏と篤は機体の限界まで上げた速度のまま、必死で飛んだ。

大切な人を救うために。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4719u/>

The kissing under the mistletoe 戦場のもみの木の下で

IS学園、最後の

2011年10月21日13時00分発行